

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報

令和 5 年度

令 和 6 年 6 月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

目 次

I 概況

1	沿革	1
2	位置	1
3	土壌	1
4	土地面積および利用区分	1
5	機構	2
6	職員	2
7	建物	4
8	新たに設置した主要施設および備品	5
9	決算	6

II 作況

1	気象経過	7
2	当場の作況	10

III 試験研究および地域支援活動の概要

1	研究部の概要	22
1)	麦類に関する試験	22
2)	畑作物に関する試験	22
3)	ばれいしょに関する試験	22
4)	牧草・飼料作物に関する試験	23
5)	栽培環境に関する試験	23
6)	病害虫に関する試験	24
7)	地域支援活動	24
2	技術普及室の活動	24

IV 研究発表および普及事項

1	研究発表	
1)	研究論文	28
2)	口頭発表	28
3)	専門雑誌記事	29
4)	著編書・資料	30
5)	新聞記事	30
2	普及事項	
1)	普及奨励事項	30
2)	普及推進事項	30
3)	指導参考事項	30
4)	研究参考事項	30
3	品種登録・特許申請	30

V 研究企画・場運営・広報活動

1	諸会議	-----	31
2	各種委員会	-----	31
3	刊行印刷物	-----	35
4	広報活動	-----	35
5	見学受入れ	-----	35

VI 技術指導および研修

1	研修生の受入れ	-----	37
2	講師派遣	-----	37
3	職員研修	-----	39
4	職場研修	-----	40
5	国際交流	-----	40

VII その他

1	技術体系化チーム	-----	41
2	オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）	-----	41
3	表彰・受賞	-----	41
4	行事	-----	42
5	自己点検への対応	-----	43
6	建物配置図	-----	44
7	圃場配置図	-----	45

I 概 況

1 沿 革

当場は、明治40年に北海道庁立地方農事試験場北見分場（地方費）として、常呂郡野付牛村（現北見市）に設置された。翌明治41年には、北海道庁立上川農事試験場北見分場となり、さらに明治43年には、第1期北海道拓殖計画の実施に伴って国費に移管され、北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、昭和17年には、北海道農業試験場北見支場となり、同19年には組織改正により、北海道農業試験場稚内分場が同北見支場稚内分場と改称され、当場の所管となった。また、昭和22年には、農林省札幌農事改良実験所北見試験地が場内に置かれ、はっか育種を担当した。

昭和25年に、農業試験研究機関の統廃合が行われ、北海道立農業試験場北見支場が設置された。同時に、当場の所管であった稚内分場は廃止され、また、札幌農事改良実験所北見試験地のはっか育種業務も遠軽町に新設された北海道農業試験場所管の試験地に移された。同年から専門技術員が駐在するようになった。また、昭和29年には大麦育種指定試験地の設置が決まり、女満別町（道立農試原々種農場女満別分場跡地）に試験地を置いて大麦育種を実施した。昭和31～34年には、道立農業試験場整備拡充計画の一環として市街化した北見市から現在地へ移転拡充し、昭和33年には大麦育種指定試験地も現在地へ移した。しかし、大麦栽培面積の減少により、昭和36年には小麦育種指定試験に切り替えられた。

昭和39年には、チモシー、スミズブロムグラス育種のため牧草育種指定試験地が設置された。

昭和39年11月に、道立農業試験場の機構改革により、当支場は北海道立北見農業試験場と改称、1課7科となった。昭和43年には、技術普及部門強化のため専門技術員室が設置され、その後2～3の科名変更や係の統廃合などがあり、平成4年には、管理科および研究各科を主管する研究部長を設置するほか、畑作園芸科を再編し園芸科に、病虫害科を病虫科にそれぞれ変更した。平成8年3月には、機構改革により水稻試験地を閉所、水稻に関する試験は上川農試に引き継いだ。

平成10年4月に馬鈴しょの耐病性育種を強化する

ため、馬鈴しょ科（馬鈴しょ育種指定試験地）が根釧農試より移転した。平成12年4月には、「道立農業試験場新研究基本計画」に基づく地域対応強化のため、研究部を作物・生産の2部制とし、専技と技術体系化チームからなる技術普及部を新設した。また、園芸科と作物科を統合し畑作園芸科に、土壤肥料科を栽培環境科に変更した。平成18年4月には、小麦科を麦類科に改称した。また、専門技術員を廃止し、主任普及指導員、主査（地域支援）を設置、総務課会計係を廃止し、主査（会計）を設置した。平成19年に創立100周年を迎え、記念事業を行った。平成22年からは、22の道立試験研究機関を統合して創設した地方独立行政法人北海道立総合研究機構に移行、グループ制を導入した。

2 位 置

当場の住所は、常呂郡訓子府町字弥生52番地で、北見バス訓子府駅停留所から北西へ約4kmの所にある（北緯43° 45'、東経143° 43'、海拔196m）。また旧水稻試験地は、同町若葉町99番地にあり、訓子府駅停留所から西へ約1km（海拔136m）の所にある。

3 土 壌

庁舎周辺の土壌は、黒ボク土あるいは多湿黒ボク土に分類される。台地上の軽石流堆積物やその二次堆積物の上に火山灰が堆積したもので、表層に腐植を多く含み、下層は堅く、排水はやや不良である。旧水稻試験地の土壌は、褐色低地土に分類される。常呂川の河川堆積物からなり、下層土は礫の多い砂土で、排水は比較的良好である。

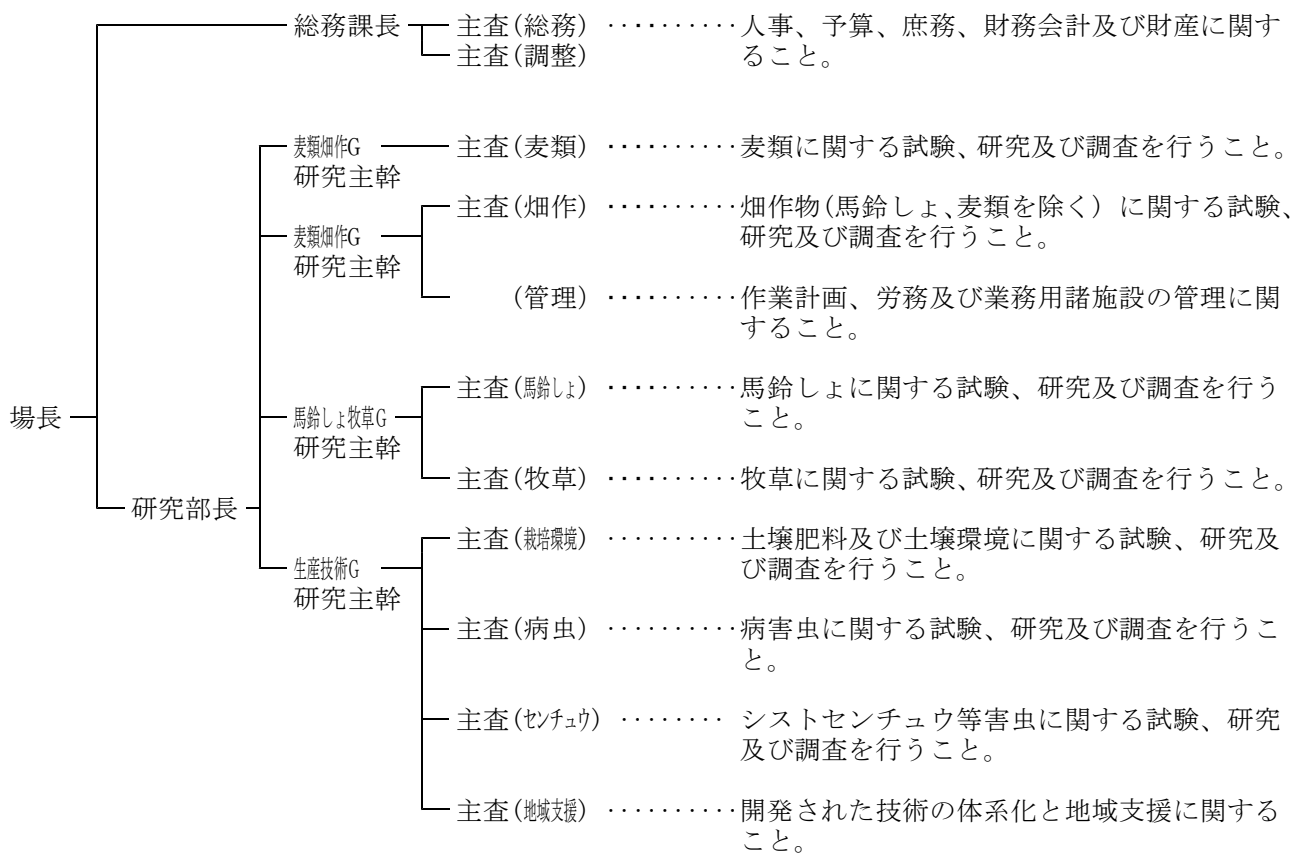
4 土地面積および利用区分

総面積1,557,688㎡

区 分	面 積 (㎡)
庁 舎 、 建 物 敷 地	118,564
公 宅 用 地	44,151 (道財産)
道 路 、 用 排 水 路	42,383
山 林	300,400
試 験 ほ 場 (畑)	709,705
〃 (隔離ほ場)	73,260
原 野 、 そ の 他	269,225

注) 上記のうち54,985㎡は旧水稻試験地

5 機 構



(道農政部技術普及室)
 上席普及指導員 — 主任普及指導員 — 主査(普及指導) …… 普及指導員の指導及び専門技術の調査研究に
 関すること。

6 職 員

(1) 職員の配置

令和6年3月31日現在														
グループ別 区 分	場 長	部 長	研 究 主 幹	麦 類 畑 作 G			馬鈴しょ牧草G		生 産 技 術 G			総務課	合 計	技 術 普及室
				麦 類	畑 作	管 理	馬鈴しょ	牧 草	栽 環	病 虫	支 援			
研究職	1	1	4	6	2		4	3	4	4	1		30	
行政職						4						5	9	3
計	1	1	4	6	2	4	4	3	4	4	1	5	39	3

(2) 令和6年3月31日現在員

職 名	身 分	氏 名	職 名	身 分	氏 名
場 長	法人職員	梶 山 努	(馬鈴しょ牧草G)		
総 務 課 長	北海道職員	古 屋 幸 生	研 究 主 幹	法人職員	宗 形 信 也
主 査 (総 務)	"	藤 田 賢 司	主 査 (馬鈴しょ)	"	品 田 博 史
主 査 (調 整)	"	成 田 信 幸	研 究 主 任	"	足 利 奈 奈
技 師	"	門 なつみ	研 究 職 員	"	和 崎 俊 文
技 師	"	大 黒 剣 太	主 査 (牧 草)	"	飯 川 圭 憲
			研 究 主 任	"	足 利 和 紀
			研 究 職 員	"	高 畠 聡 史
< 研 究 部 >					
研 究 部 長	法人職員	岩 崎 暁 生	(生産技術G)	法人職員	笛 木 伸 彦
(麦類畑作G)			研 究 主 幹	"	板 垣 英 祐
研 究 主 幹	法人職員	大 西 志 全	主 査 (栽培環境)	"	木 場 稔 信
研 究 主 幹	"	鳥 越 昌 隆	研 究 主 査	"	桑 原 萌 吾
主 査 (麦 類)	"	其 田 達 也	研 究 主 任	"	三 和 優 奈
研 究 主 査	"	木 内 均 希	研 究 職 員	"	小 倉 玲 奈
研 究 主 任	"	林 和 希 美	主 査 (病 虫)	"	小 澤 徹 実
研 究 職 員	"	佐 藤 優 介	主 査 (センチュウ)	"	森 万 菜 太
"	"	斉 藤 涼 真	研 究 主 任	"	佐 々 木 一 生
"	"	村 山 真 也	研 究 職 員	"	田 中
主 査 (畑 作)	"	池 谷 暁 子	主任主査(地域支援)	"	
研 究 主 任	"	伊 藤 幸 雄	(道技術普及室)		
主 査 (研究支援)	"	中 出 秀 信	上席普及指導員	北海道職員	片 山 正 寿
主 任	"	横 川 愁 斗	主任普及指導員	"	添 島 均
技 師	"	柴 田 匠	主 査 (普及指導)	"	浅 田 洋 平

(3) 転入者および採用者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
総 務 課 長	古 屋 幸 生	5. 4. 1	農政部畜産振興課から
主 査 (調 整)	成 田 信 幸	5. 4. 1	釧路総合振興局から
研 究 主 幹	鳥 越 昌 隆	5. 4. 1	酪農試験場天北支場から
研 究 主 幹	笛 木 伸 彦	5. 4. 1	農業研究本部から
主 査 (栽培環境)	板 垣 英 祐	5. 4. 1	酪農試験場から
主 査 (センチュウ)	小 澤 徹 実	5. 4. 1	中央農業試験場から
研 究 主 任	森 万 菜 太	5. 4. 1	中央農業試験場から
上席普及指導員	片 山 正 寿	5. 4. 1	農政部技術普及課から
主 査 (普及指導)	浅 田 洋 平	5. 4. 1	農政部技術普及課から
研 究 職 員	村 山 真 也	5. 4. 1	新規採用
研 究 職 員	石 川 圭 大	5. 4. 1	新規採用

(4) 転出者および退職者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
研 究 部 長	岩 崎 暁 生	6. 3. 31	退職
主 査 (総 務)	藤 田 賢 司	6. 3. 31	留萌振興局へ
主 査 (調 整)	成 田 信 幸	6. 3. 31	十勝農業試験場へ
技 師	大 黒 剣 太	6. 3. 31	退職
研 究 主 幹	笛 木 伸 彦	6. 3. 31	上川農業試験場へ
研 究 主 任	田 澤 暁 子	6. 3. 31	十勝農業試験場へ
研 究 主 任	足 利 和 紀	6. 3. 31	畜産試験場へ
研 究 主 任	足 利 奈 奈	6. 3. 31	十勝農業試験場へ
研 究 職 員	佐 々 木 太 陽	6. 3. 31	中央農業試験場へ
上席普及指導員	片 山 正 寿	6. 3. 31	空知農業改良普及センターへ
主 査 (普及指導)	浅 田 洋 平	6. 3. 31	農政部技術普及課へ

7 建 物

資産名称	建築年月	構造名	延面積(㎡)	備 考
庁舎	S33. 9	ブロック造	1,495.37	
てん菜分析室	S34.10	木造	99.09	
根菜貯蔵庫	S35.12	鉄筋コンクリート造	30.60	
車両庫	S45. 7	鉄骨造	140.66	
第2号ガス貯蔵庫	S46. 6	ブロック造	3.53	
豆類D型ハウス	S53. 3	鉄骨造	233.28	
園芸資材庫	S54. 4	鉄骨造	64.80	
緑体春化施設	S56.10	鉄骨造	232.00	
玉ねぎ貯蔵庫	S57. 9	ブロック造	127.00	
昆虫飼育ガラス・温室	S57.10	鉄骨造	25.92	
管理科事務所	S58.11	木造	172.53	現契約職員詰所
参観人便所	S59. 9	コンクリートブロック造	14.24	
ガラス・網室	S59.12	鉄骨造	116.91	
小農具庫及び農薬庫	S61. 1	ブロック造	136.08	
種子貯蔵庫	S61. 9	ブロック造	59.40	
園芸調査室兼温室	S63.10	コンクリートブロック造	498.96	
農機具格納庫	H 1.10	コンクリートブロック造	728.50	
牧草調査室	H 1.11	木造	243.00	
小麦生育温室	H 2.10	コンクリートブロック造	197.84	
小麦調査室及び病虫調査室	H 2.12	木造	245.52	
土壌肥料調査室	H 3.12	木造	204.00	
普通車庫	H 4. 9	鉄骨造	231.00	
トラクター車庫	H 5. 2	鉄骨造	262.50	
作物調査室	H 5. 9	木造	200.00	
共同作業室	H 5.12	鉄骨造	708.75	
病虫温室	H 7.12	鉄骨造	314.64	
牧草温室	H 8.12	鉄骨造	315.00	
農具庫（馬鈴しょ）	H10. 3	鉄骨造	199.68	
馬鈴しょ育種施設	H10. 3	鉄骨造	676.20	(実験室、温室、網室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄骨造	346.50	(調査室、浴光催芽室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄筋コンクリート造	204.00	(貯蔵庫)
赤カビ検定用採種ハウス1	H11.11	鉄骨造	98.00	
赤カビ検定用採種ハウス2	H11.11	鉄骨造	98.00	
作物温室	H11.12	鉄骨造	305.75	
てん菜育苗施設	H13.11	鉄骨造	216.00	
農業資材庫	H15. 1	鉄骨造	272.16	
貨物車両庫	H16.12	鉄骨造	273.60	
資料保管庫	H27. 3	木造	141.60	
合 計			9,932.61	

8 新たに設置した主要施設および備品

(1) 施設

該当なし

(2) 備品

名 称	形 式		金 額 (円)	配 置
スーパーカブ (2台)	ホンダ	排気量50CC未満	517,000	麦類畑作G
据置型アルコールチェッカー	サンコーテクノ	ST-3000	173,800	麦類畑作G
1畦アーリーデガー	東洋農機	TPD1V	2,915,000	馬鈴しょ牧草G
人工気象器	日本医科器械製作所	LH-241PFDT-S	1,540,000	馬鈴しょ牧草G
デスクトップパソコン(3台)	i i y a m a	S06M-134-UHX	462,000	生産技術G
ライマン価測定装置	旭川計量器	R-1000	880,000	馬鈴しょ牧草G
GNSSガイダンス・自動操舵システム	ニコントリンブル	GFX-750+NAV-900、A PEMD-RTK	2,530,000	麦類畑作G
ワンタッチイベントテント3030	C A R A V A N	アルミフレーム3.0×3.0	132,000	麦類畑作G
電動オロシーデラックス	ハッピージャパン	RHG-16H	176,000	麦類畑作G
近赤外線分光分析装置	パーカーコーポレーション	GS-ANLZR-A-1	939,950	麦類畑作G
パワーサプライ(電気泳動用)	A S O N E	PowerPac(TM)Basic 2-8338-01	118,800	麦類畑作G
ゲル撮影装置	日本ジェネティクス	FAS-BG LED BOX	470,250	生産技術G
サーマルサイクラー	Thermo Fisher	Mini Amp Plus	649,000	生産技術G
レーザープリンター	C a n o n	LBP861C	137,500	馬鈴しょ牧草G
プロジェクター	R I C O H	PJ WXL4960	175,560	総務課
デスクトップパソコン	D E L L	VOSTRO3020SFF	178,200	麦類畑作G
デスクトップパソコン	D E L L	VOSTRO3020SFF	178,200	馬鈴しょ牧草G
フリーチョッパー	サンエイ工業	SMC-1600	1,155,000	麦類畑作G
ロータリーオープン	戸倉商事	TRV-7041	3,905,000	麦類畑作G
役員用家具一式(両袖デスク ほか15点)	内田洋行		3,195,500	総務課
両袖デスク	コクヨ	D700×W1600×H720	109,098	総務課
両袖デスク	コクヨ	D700×W1400×H720	104,940	総務課
両袖デスク(3台)	コクヨ	D700×W1400×H720	314,820	麦類畑作G
両袖デスク(3台)	コクヨ	D700×W1400×H720	314,820	麦類畑作G
両袖デスク(4台)	コクヨ	D700×W1400×H720	419,760	馬鈴しょ牧草G
両袖デスク(3台)	コクヨ	D700×W1400×H720	314,820	馬鈴しょ牧草G
1畦ポテトデガー	ノブタ農機	NP60bd2	1,045,000	馬鈴しょ牧草G
デスクトップパソコン(2台)	D E L L	VOSTRO3020SFF	303,600	生産技術G
合 計			23,355,618	

9 決 算（支出額）

（単位：円）

科 目	予 算 額	支 出 済 額	残 額	備 考
戦 略 研 究 費	0	0	0	
重 点 研 究 費	1,782,000	1,749,785	32,215	
職 員 研 究 奨 励 費	962,000	962,000	0	
経 常 研 究 費	20,347,000	19,784,901	562,099	
依 頼 試 験 費	0	0	0	
研 究 開 発 推 進 費	880,000	880,000	0	
技 術 普 及 指 導 費	727,500	679,460	48,040	
研 究 用 備 品 整 備 費	2,530,000	2,530,000	0	
維持管理経費（研究）	725,000	725,000	0	
研究用備品整備費（積立金）	0	0	0	
維持管理経費（一般）	35,106,000	34,216,793	889,207	
研究関連維持管理経費	1,096,000	1,096,000	0	
知 的 財 産 経 費	0	0	0	
運 営 経 費	40,076,000	39,159,976	916,024	
共 同 研 究 費	7,650,000	7,650,000	0	
国 庫 受 託 研 究 費	220,000	220,000	0	
道 受 託 研 究 費	4,845,000	4,826,469	18,531	
そ の 他 受 託 研 究 費	67,387,607	67,386,467	1,140	
そ の 他 補 助 金	28,535,800	28,535,800	0	
維持管理経費（目的積立金）	0	0	0	
施設整備費補助金	0	0	0	
施設整備費（繰越積立金）	0	0	0	
科学 研究 費 補 助 金	904,000	904,000	0	
合 計	213,773,907	211,306,651	2,467,256	

※ 人件費（研究職員費・派遣職員費・準職員費）を除く。

Ⅱ 作 況

1. 気象経過

(1) 融雪期以降の経過

4月：平均気温は上旬が平年より極めて高く、中旬・下旬がやや高かった。月平均気温は6.9℃で平年より高かった(1.9℃)。降水量は上旬が平年並、中旬・下旬が極めて多かった。月合計は84.5mmで平年より多かった(37.6mm)。日照時間は上旬がやや少なく、中旬・下旬が平年並であった。月合計は153.5時間で平年よりやや少なかった(-43.4時間)。

5月：平均気温は上旬が平年並、中旬がやや高く、下旬が平年並であった。月平均気温は12.0℃で平年並であった(0.4℃)。降水量は上旬・中旬・下旬とも少なかった。月合計は11mmで平年より少なかった(-46.7mm)。日照時間は上旬・中旬・下旬とも平年並であった。月合計は192.4時間で平年並であった(6.6時間)。

6月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬が高く、下旬が極めて高かった。月平均気温は17.5℃で平年より極めて高かった(2.5℃)。降水量は上旬が多く、中旬・下旬が少なかった。月合計は59.5mmで平年よりやや少なかった(-22.5mm)。日照時間は上旬がやや少なく、中旬がやや多く、下旬がやや多かった。月合計は173.6時間で平年より平年並であった(15.1時間)。

7月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬が平年並、下旬が極めて高かった。月平均気温は21.2℃で平年よりやや高かった(1.3℃)。降水量は上旬がやや多く、中旬が平年並、下旬が多かった。月合計は101mmで平年並であった(14.6mm)。日照時間は上旬が平年並、中旬が少なく、下旬が平年並であった。月合計は160時間で平年並であった(-22.1時間)。

8月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬・下旬が極めて高かった。月平均気温は22.9℃で平年より極めて高かった(3.4℃)。降水量は上旬が多く、中旬・下旬が少なかった。月合計は132mmで平年よりやや少なかった(-43.5mm)。日照時間は上旬がやや少ない、中旬・下旬が多かった。月合計は168.1時間で平年よりやや多い(32.4

時間)。

9月：平均気温は上旬・中旬が極めて高く、下旬がやや高かった。月平均気温は18.6℃で平年より極めて高かった(3℃)。降水量は上旬が多く、中旬が極めて多く、下旬がやや多かった。月合計は195mmで平年より多かった(94mm)。日照時間は上旬・中旬・下旬とも平年並であった。月合計は144.6時間で平年並であった(-15.4時間)。

10月：平均気温は上旬が平年並、中旬が平年より高く、下旬がやや高かった。月平均気温は9.8℃で平年よりやや高かった(1.3℃)。降水量は上旬が多く、中旬が平年並、下旬が少なかった。月合計は80.0mmで平年並であった(1.3mm)。日照時間は上旬はやや少なく、中旬・下旬は平年並であった。月合計は167.3時間で平年並であった(-0.6時間)。

11月：平均気温は上旬が極めて高く、中旬がやや高かった。中旬までの平均気温は5.8℃で平年より極めて高かった(2.7℃)。降水量は上旬はやや少なく、中旬は極めて多かった。中旬までの合計は42mmで平年並であった(4.9mm)。日照時間は上旬が平年より少なく、中旬が平年並であった。中旬までの合計は74.1時間で平年より並であった(-17.9時間)。

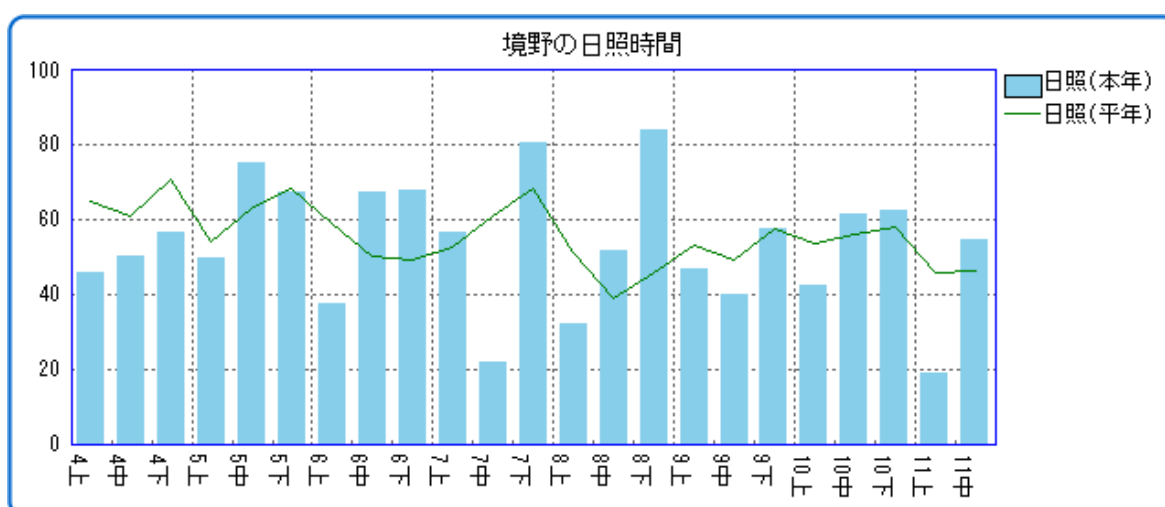
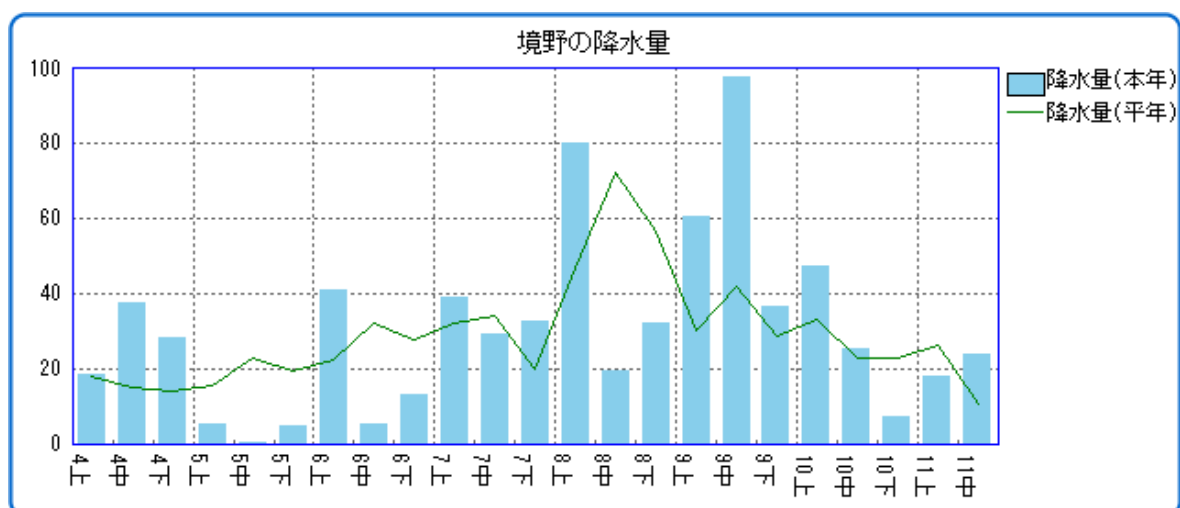
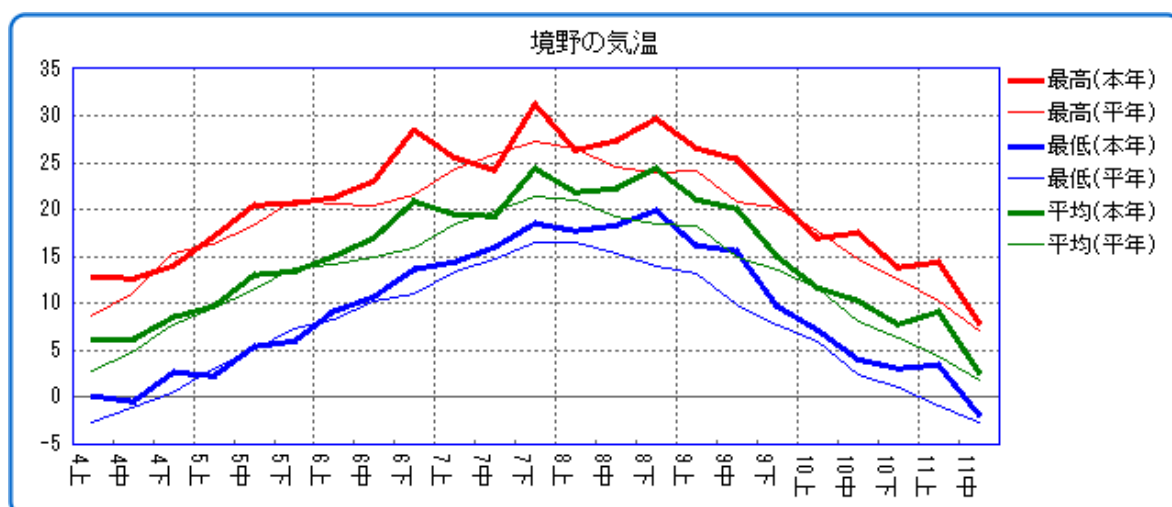
農耕期間中(5月～9月)の気温、降水量及び日照時間の推移を平年と比較すると以下のとおりである。

気温：5月は平年並、6月は極めて高く、7月はやや高く、8月・9月は極めて高かった。この期間の日平均気温の積算値は2819.7℃であった(平年差320.5℃、平年比113%)。

降水量：5月は平年より少なく、6月はやや少なく、7月は平年並、8月はやや少なく、9月は多かった。この期間の降水量の積算は502.7mmであった(平年差-4.2mm、平年比99%)。

日照時間：5月・6月・7月は平年並で、8月はやや多く、9月は平年並であった。この期間の日照時間の積算値は838.7時間であった(平年差16.4時間、平年比102%)。

2) 気温、降水量及び日照時間の平年との比較



3) 気象表

年月	旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
2023年	上旬	6.1	2.7	3.4	12.8	8.6	4.2	0.1	-2.8	2.9	18.5	18.0	0.5	46.0	65.0	-19.0
4月	中旬	6.2	4.7	1.5	12.6	11.0	1.6	-0.5	-1.1	0.6	37.5	15.0	22.5	50.6	61.2	-10.6
	下旬	8.4	7.7	0.7	13.9	15.2	-1.3	2.6	0.4	2.2	28.5	13.9	14.6	56.9	70.8	-13.9
	上旬	9.6	9.5	0.1	17.2	16.3	0.9	2.3	2.9	-0.6	5.5	15.5	-10.0	49.7	54.4	-4.7
5月	中旬	12.9	11.4	1.5	20.4	18.3	2.1	5.3	5.0	0.3	0.5	22.9	-22.4	75.2	63.2	12.0
	下旬	13.4	13.8	-0.4	20.7	20.9	-0.2	6.0	7.2	-1.2	5.0	19.3	-14.3	67.5	68.2	-0.7
	上旬	14.9	14.1	0.8	21.3	20.6	0.7	9.1	8.3	0.8	41.0	22.5	18.5	37.8	59.0	-21.2
6月	中旬	16.9	14.9	2.0	23.0	20.3	2.7	10.6	10.2	0.4	5.5	31.9	-26.4	67.7	50.4	17.3
	下旬	20.8	15.9	4.9	28.5	21.5	7.0	13.6	11.0	2.6	13.0	27.6	-14.6	68.1	49.2	18.9
	上旬	19.5	18.4	1.1	25.6	24.3	1.3	14.3	13.4	0.9	39.0	32.1	6.9	56.9	52.9	4.0
7月	中旬	19.3	19.8	-0.5	24.2	25.8	-1.6	16.0	14.7	1.3	29.5	34.3	-4.8	22.1	61.0	-38.9
	下旬	24.4	21.4	3.0	31.2	27.2	4.0	18.5	16.4	2.1	32.5	20.0	12.5	81.0	68.3	12.7
	上旬	21.9	21.0	0.9	26.4	26.5	-0.1	17.7	16.4	1.3	80.5	46.7	33.8	32.2	51.2	-19.0
8月	中旬	22.2	19.3	2.9	27.3	24.6	2.7	18.2	15.2	3.0	19.5	72.4	-52.9	51.7	38.9	12.8
	下旬	24.4	18.5	5.9	29.7	24.0	5.7	19.9	14.0	5.9	32.0	56.5	-24.5	84.2	45.6	38.6
	上旬	21.0	18.2	2.8	26.6	24.2	2.4	16.2	13.2	3.0	60.5	30.2	30.3	46.8	53.1	-6.3
9月	中旬	20.0	15.0	5.0	25.3	20.8	4.5	15.6	9.9	5.7	98.0	41.9	56.1	39.9	49.4	-9.5
	下旬	14.9	13.5	1.4	21.0	20.2	0.8	9.6	7.7	1.9	36.5	28.9	7.6	57.9	57.5	0.4
	上旬	11.6	11.5	0.1	17.0	17.6	-0.6	7.2	5.9	1.3	47.5	33.3	14.2	42.7	53.8	-11.1
10月	中旬	10.2	8.0	2.2	17.5	14.7	2.8	3.9	2.3	1.6	25.5	22.8	2.7	61.8	56.1	5.7
	下旬	7.7	6.3	1.4	13.7	12.5	1.2	2.9	0.9	2.0	7.0	22.7	-15.7	62.8	57.9	4.9
	上旬	9.0	4.3	4.7	14.3	10.1	4.2	3.4	-1.0	4.4	18.0	26.4	-8.4	19.1	45.8	-26.7
11月	中旬	2.6	1.8	0.8	7.9	7.0	0.9	-1.9	-2.8	0.9	24.0	10.7	13.3	55.0	46.2	8.8
平均値(合計値)		8.1	6.7	1.3	14.3	12.7	1.6	2.3	1.2	1.1	1050.0	1072.0	-22.0	2348.7	2345.8	2.9
4月		6.9	5.0	1.9	13.1	11.6	1.5	0.7	-1.2	1.9	84.5	46.9	37.6	153.5	196.9	-43.4
5月		12.0	11.6	0.4	19.5	18.6	0.9	4.6	5.1	-0.5	11.0	57.7	-46.7	192.4	185.8	6.6
6月		17.5	15.0	2.5	24.3	20.8	3.5	11.1	9.9	1.2	59.5	82.0	-22.5	173.6	158.5	15.1
7月		21.2	19.9	1.3	27.1	25.8	1.3	16.3	14.9	1.4	101.0	86.4	14.6	160.0	182.1	-22.1
8月		22.9	19.5	3.4	27.9	25.0	2.9	18.6	15.2	3.4	132.0	175.5	-43.5	168.1	135.7	32.4
9月		18.6	15.6	3.0	24.3	21.8	2.5	13.8	10.3	3.5	195.0	101.0	94.0	144.6	160.0	-15.4
10月		9.8	8.5	1.3	16.0	14.8	1.2	4.6	2.9	1.7	80.0	78.7	1.3	167.3	167.9	-0.6
11月(中旬まで)		5.8	3.1	2.8	11.1	8.6	2.6	0.8	-1.9	2.7	42.0	37.1	4.9	74.1	92.0	-17.9

注) 観測値は置戸町境野のアメダスによる(てん蔵の定期作況気象情報)。

10年平均は前10か年の平均値である。

4) 季節表および農耕期間の平均気温、降水量、日照時間の積算値

年次	初 霜 (年. 月. 日)	根 雪 始 (年. 月. 日)	通常の根雪終 (年. 月. 日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年. 月. 日)	耕鋤始 (年. 月. 日)	晩霜 (年. 月. 日)	初 霜 (年. 月. 日)	無 霜 期 間 (日)	降 雪 始 (年. 月. 日)
本年	2022.10.7	2022.12.18	2023.3.24	97	2023.4.16	2023.4.14	2023.5.9	2023.10.17	160	2023.11.11
平年	10.15	12.8	4.7	121	4.26	4.22	5.10	10.13	155	11.4
比較	-8	10	-14	-24	-10	-8	-1	4	5	7

注) 農耕期間の積算値は置戸町境野のアメダスにより、それ以外は北見農試観測値である。

平年値は前10か年の平均値である。

期間	項目	平均気温	降水量	日照時間
		(℃)	(mm)	(hr)
5月上旬 ～ 9月下旬	本年	2,819.7	498.5	838.7
	10年平均	2,499.2	502.7	822.3
	比較	320.5	-4.2	16.4

2 当場の作況

注) 本作況報告は北海道立総合研究機構北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、網走管内全体を代表するものではありません。

1) 秋まき小麦（令和4年9月播種）

作 況：不良

事 由：播種期は平年より7日早い9月16日であった。出芽期は平年より8日早い9月22日であった。播種が早く、出芽期以降、平均気温が平年より高い傾向で経過したため、越冬前の草丈、茎数は平年を上回った。根雪始は平年より10日遅い12月18日、根雪終は平年より14日早い3月24日で、根雪期間は平年より24日短かった。調査圃場は融雪剤を散布したため、融雪期が根雪の観測地点より10日早い3月15日で、雪腐病の発生は僅かに認められた。コムギ縞萎縮病が発生し、やや激しい萎縮症状が認められた。5月下旬から6月中旬は平均気温が平年並から高く経過し、出穂

期は平年より4日早い6月5日であった。登熟期間の気温は6月下旬は極めて高く、7月上旬はやや高く推移したため登熟は平年よりやや早く進み、成熟期は平年より9日早く7月16日だった。登熟期間は平年より5日短くなった。コムギ縞萎縮病発生の影響で稈長は平年を下回り、穂長は平年並、穂数は平年を上回った。コムギ縞萎縮病により生育が抑えられたことや登熟期間が平年より短かったことにより、子実の充実が不足し、千粒重、リットル重がともに平年を下回り、子実重は平年比77%であった。検査等級は1等であった。これらのことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目		きたほなみ		
		本年	平年	比較
播種期	(令和4年月.日)	9.16	9.23	△ 7
出芽期	(令和4年月.日)	9.22	9.30	△ 8
出穂期	(令和5年月.日)	6.05	6.09	△ 4
成熟期	(令和5年月.日)	7.16	7.25	△ 9
草丈 (cm)	(令和4年11月20日)	19.7	13.5	6.2
	(令和5年5月20日)	39.3	34.8	4.5
	(令和5年6月20日)	77.3	84.0	△ 6.7
茎数 (本/㎡)	(令和5年11月20日)	1643	853	790
	(令和5年5月20日)	1743	1301	442
	(令和5年6月20日)	874	707	167
成熟期	稈長 (cm)	71	77	△ 6
	穂長 (cm)	7.8	8.3	△ 0.5
	穂数 (本/㎡)	759	650	109
子実重 (kg/10a)		543	705	△ 162
同上平年比 (%)		77	100	△ 23
リットル重 (g)		767	795	△ 28
千粒重 (g)		35.3	40.1	△ 4.8
品質 (検査等級)		1	1	-

注) 平年値は前7か年中、令和元年年（最豊）、令和4年（最凶）を除く5か年の平均値。

2) 秋まき小麦（令和5年9月播種）

作 況：やや良

事 由：播種期は平年より4日遅い9月25日であった。出芽期は平年より3日遅い10月1日であった。播種が遅かったが、出芽期以降、

平均気温が平年より高く経過したため、越冬前の草丈は平年並で茎数は平年を上回った。以上のことから、目下の作況は「やや良」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期（令和5年月.日）	9.25	9.21	4
出芽期（令和5年月.日）	10.01	9.28	3
草丈(cm)（令和5年11月20日）	15.4	15.3	0.1
茎数(本/㎡)（令和5年11月20日）	1263	1048	215

注) 平年値は前7か年中、令和元年(最豊)、令和4年(最凶)を除く5か年の平均値。

3) 春まき小麦

作 況：平年並

事 由：調査圃場は融雪剤散布により3月16日に融雪期となった。3月下旬から4月上旬の気温は高かったため、圃場の乾燥が進み、播種期は平年より1日早い4月13日となった。出芽期は1日から2日遅かったが、5月下旬から6月中旬は平均気温が平年並から高く経過し、生育が進み、出穂期は平年より3日早かった。稈長は短く、穂長、穂数は平年並であった。

倒伏や赤かび病の発生はほとんど見られなかった。成熟期は平年より9日早かったことから、登熟期間は平年より6日短かったが、子実重は平年比100～105%で平年並からやや上回った。リットル重は平年並からやや上回り、千粒重は平年を上回った。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目	春よ恋			はるきらり			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	4.13	4.14	△ 1	4.13	4.14	△ 1	
出芽期 (月.日)	4.30	4.28	2	5.1	4.30	1	
出穂期 (月.日)	6.17	6.20	△ 3	6.16	6.19	△ 3	
成熟期 (月.日)	7.28	8.6	△ 9	7.31	8.9	△ 9	
草丈 (cm)	(5月20日)	21.6	20.6	1.0	23.3	21.9	1.4
	(6月20日)	69.7	71.0	△ 1.3	71.5	70.7	0.8
茎数 (本/㎡)	(5月20日)	613	658	△ 45	563	638	△ 75
	(6月20日)	800	802	△ 2	778	786	△ 8
稈長 (cm) (7月20日)	86	95	△ 9	86	91	△ 6	
穂長 (cm) (7月20日)	8.5	8.4	0.1	7.8	7.8	0.0	
穂数 (本/㎡) (7月20日)	629	704	△ 75	687	700	△ 13	
子実重 (kg/10a)	513	514	△ 1	537	513	25	
同上平年比 (%)	100	100	△ 0	105	100	5	
リットル重 (g)	791	782	9	795	778	17	
千粒重 (g)	40.5	38.2	2.3	42.5	39.5	3.0	
品質 (検査等級)	1	1	-	1	1	-	

注) 平年値は前7か年中、令和3年(最豊)、平成29年(最凶)を除く5か年の平均。

4) とうもろこし（サイレージ用）

作 況：平年並

事 由：播種期は平年と同日の5月16日、出芽期は平年より6日遅い6月8日であった。播種後の乾燥により出芽が遅れたものの、6月中旬以降は高温で経過し、雄穂開花期は平年より5日、絹糸抽出期は4日早かった。さらに8月中旬以降は極めて高温で経過し、登熟が平年よりやや早く進んだ。収穫期は平年

と同日の9月26日であり、収穫時の熟度は黄熟中期～黄熟後期で平年よりやや進んでいた。稈長は平年並であった。総体の乾物率は平年より7.5ポイント高く、乾物総重および推定 TDN 収量は平年比102%および104%と平年並であった。

以上のことから、今年の作況は「平年並」である。

調査項目		KD320		
		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.16	5.16	0
出芽期	(月.日)	6.08	6.02	6
開花期	(月.日)	7.29	8.03	△ 5
抽糸期	(月.日)	7.29	8.02	△ 4
収穫期	(月.日)	9.26	9.26	0
収穫時の熟度		黄熟中期～ 黄熟後期	黄熟初期	-
草丈(cm)	(6月20日)	22.7	29.1	△ 6.4
	(7月20日)	182.8	166.2	16.6
	(8月20日)	281.4	276.3	5.1
稈長(cm)	(9月20日)	246	249	△ 3
葉数(枚)	(6月20日)	4.4	5.0	△ 0.6
	(7月20日)	12.0	12.8	△ 0.8
	(8月20日)	15.7	15.3	0.4
生総重(kg/10a)		5484	6742	△ 1258
乾物茎葉重(kg/10a)		923	1002	△ 79
乾物雌穂重(kg/10a)		1128	1008	120
乾物総重(kg/10a)		2051	2010	41
同上平年比(%)		102	100	2
推定TDN収量(kg/10a)		1496	1440	56
同上平年比(%)		104	100	4
総体の乾物率(%)		37.5	30.0	7.5
乾雌穂重割合(%)		55.0	50.1	4.9
有効雌穂割合(%)		100	100	0.0

注1) 昨年度から調査品種を「KD320」に変更。平年値は前5か年の平均。

2) 推定TDN収量＝乾物茎葉重×0.582＋乾物雌穂重×0.850。

3) 乾物収量や割合に関する一部の項目は、小数点以下の四捨五入などの計算方法により、表中の数値をもとに計算しても一致しない場合がある。

5) 大 豆

作 況：良

事 由：播種は平年より2日早い5月19日に行い、出芽期も平年より2日早く6月1日であった。高温傾向により初期生育は順調で、開花始は平年より8日早い7月10日で、以降も9月まで高温傾向がつづいたため生育は旺盛であった。成熟期は平年並の9月22日で登熟期間

は長く、成熟期の主茎長、主茎節数、分枝数はいずれも平年を上回り、着莢数も平年を大きく上回った。一莢内粒数はやや少なかったが百粒重は重く、子実重は平年の134%と多収であった。くず粒率は低く、外観品質は優った。以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目		ユキホマレ		
		本年	平年	比較
播種期	(月・日)	5.19	5.21	△ 2
出芽期	(月・日)	6.01	6.03	△ 2
開花始	(月・日)	7.10	7.18	△ 8
成熟期	(月・日)	9.22	9.22	0
主茎長(cm)	(6月20日)	14.3	10.3	4.0
	(7月20日)	49.1	49.8	△ 0.7
	(8月20日)	72.5	61.5	11.0
	(9月20日)	68.3	61.7	6.6
	(成熟期)	69.3	62.0	7.3
本葉数(枚)	(6月20日)	2.2	0.9	1.3
	(7月20日)	7.3	7.4	△ 0.1
主茎節数	(8月20日)	10.8	10.3	0.5
	(9月20日)	10.4	10.0	0.4
	(成熟期)	10.6	10.1	0.5
分枝数(本/株)	(7月20日)	4.3	4.6	△ 0.3
	(8月20日)	5.8	5.6	0.2
	(9月20日)	5.3	5.0	0.3
	(成熟期)	5.5	5.1	0.4
着莢数(個/株)	(8月20日)	100.5	79.2	21.3
	(9月20日)	102.9	73.4	29.5
	(成熟期)	91.1	72.2	18.9
一莢内粒数		1.81	1.93	△ 0.12
子実重(kg/10a)		461	345	116
同上平年比(%)		134	100	
百粒重(g)		37.2	31.6	5.6
屑粒率(%)		0.7	1.8	△ 1.1
品質(検査等級)		1等	2上	

注1) 平年値は前7か年中、28年(最凶)、令和元年(最豊)を除く5か年の平均。

2) 8月の着莢数は、莢の長さが2cm以上のものを示す。

3) 子実重は水分15%換算。

4) 品質(検査等級)は造りによる検査である。

6) 小 豆

作 況：不良

事 由：播種は平年より2日早い5月19日に行い、出芽期も平年より2～3日早い6月7日だった。出芽後は高温傾向により生育は旺盛で、開花期は平年より6～7日早い7月18日であった。その後も高温傾向が続いたため徒長傾向となり、倒伏が多発した。また、マメノメイガの被害も認められた。成熟期は「エリモ ショウズ」「きたろまん」ともに9月9日で、平年より18～19日早かった。平年と比較して成

熟期の主茎長は著しく長く、主茎節数は多く、分枝数は同等から多く、着莢数は多かった。一莢内粒数は少なく、百粒重は軽く、子実重は「エリモショウズ」で平年の74%、「きたろまん」で71%と著しい低収であった。くず粒率はやや高く、等級はやや劣った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目		エリモショウズ			きたろまん		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.19	5.21	△ 2	5.19	5.21	△ 2
出芽期	(月.日)	6.07	6.09	△ 2	6.07	6.10	△ 3
開花始	(月.日)	7.18	7.25	△ 7	7.18	7.24	△ 6
成熟期	(月.日)	9.09	9.28	△ 19	9.09	9.27	△ 18
主茎長 (cm)	(6月20日)	4.4	3.4	1.0	4.3	3.3	1.0
	(7月20日)	28.2	18.6	9.6	29.4	17.6	11.8
	(8月20日)	92.1	63.1	29.0	103.7	63.7	40.0
	(9月20日)		68.6			72.6	
本葉数 (枚)	(6月20日)	1.1	0.3	0.8	1.2	0.3	0.9
	(7月20日)	9.4	6.7	2.7	9.2	6.4	2.8
主茎節数	(8月20日)	16.4	14.2	2.2	16.7	13.4	3.3
	(9月20日)		14.3			13.7	
	(成熟期)	16.1	14.0	2.1	15.6	13.5	2.1
分枝数 (本/株)	(7月20日)	4.3	2.3	2.0	2.8	2.0	0.8
	(8月20日)	5.7	4.3	1.4	3.4	3.3	0.1
	(9月20日)		3.7			2.9	
	(成熟期)	5.3	4.3	1.0	3.2	3.4	△ 0.2
着莢数 (個/株)	(8月20日)	64.3	38.7	25.6	66.4	36.4	30.0
	(9月20日)		51.2			49.7	
	(成熟期)	65.4	53.2	12.2	67.0	51.0	16.0
一莢内粒数		6.17	6.27	△ 0.10	5.80	6.38	△ 0.58
子実重(kg/10a)		277	372	△ 95	261	368	△ 107
同上平年比(%)		74	100		71	100	
百粒重(g)		13.2	15.1	△ 1.9	14	16.8	△ 2.8
屑粒率(%)		10.3	9.1	1.2	9.0	8.4	0.6
品質(検査等級)		4下	4上		4中	4上	

注1) 平年値は前7か年中、平成28年(最凶)、令和元年(最豊)を除く5か年の平均。

2) 8月の着莢数は、莢の長さが3cm以上のものを示す。

3) 子実重は水分15%換算。

4) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

7) 菜 豆

作 況：平年並

事 由：播種は平年より1日早い5月19日に行い、少雨傾向により出芽期は平年より2日遅い6月3日であった。出芽後は高温に経過したため初期生育は順調で、開花始は平年より9日早い6月30日だった。その後も高温傾向が続いたため莢の登熟が急激に進み、成熟期は平年より14日早い8月19日だった。成熟期の本葉数

と分枝数は平年を下回ったが、草

丈は長く、着莢数は同等だった。一莢内粒数は平年の102%、百粒重は89%と小粒で、子実重は平年並であった。成熟期前後に降雨が少なかったためくず粒率は低く、等級はやや優った。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目		大正金時		
		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.19	5.20	△ 1
出芽期	(月.日)	6.03	6.01	2
開花始	(月.日)	6.30	7.09	△ 9
成熟期	(月.日)	8.19	9.02	△ 14
草丈 (cm)	(6月20日)	13.2	10.7	2.5
	(7月20日)	44.5	38.1	6.4
	(8月20日)	46.4	41.4	5.0
	(成熟期)	46.4	41.0	5.4
本葉数 (枚)	(6月20日)	2.1	0.8	1.3
	(7月20日)	3.0	4.0	△ 1.0
主茎節数	(8月20日)	5.0	5.6	△ 0.6
	(成熟期)	5.0	5.6	△ 0.6
分枝数 (本/株)	(7月20日)	5.6	5.4	0.2
	(8月20日)	5.4	5.1	0.3
	(成熟期)	5.4	5.2	0.2
着莢数 (個/株)	(8月20日)	20.0	20.0	0.0
	(成熟期)	20.0	19.8	0.2
一莢内粒数		2.92	2.86	0.06
子実重(kg/10a)		303	303	100
同上平年比(%)			100	
百粒重(g)		58.4	65.4	△ 7.0
屑粒率(%)		2.6	25.8	△ 23.2
品質(検査等級)		3下	4上	

注1) 平年値は前7か年中、令和4年(最豊)、令和3年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重は水分15%換算。

3) 品質(検査等級)は造りによる検査である。

8) ばれいしょ

作 況：平年並

事 由：植え付けは平年並の5月11日に行った。5月中旬の気温がやや高かったため、萌芽期は「男爵薯」、「コナユタカ」とともに平年より3日早かった。萌芽後も6月中旬まで気温が平年並～高く推移したため、開花始は平年よりも3～6日早かった。萌芽から生育初期にかけて気温が高く推移し生育が早く進んだこと、7月の降水量は平年並、気温はやや高かったことから、塊茎の肥大は良好であった。

「男爵薯」の枯ちよう期は平年よりも4日遅い9月4日であった。上いも数が多く、上いも

重は平年比127%で平年を大きく上回ったが、中心空洞と褐色心腐が発生していた。「コナユタカ」の枯ちよう期は平年よりも4日早い10月10日であった。上いも数がやや多かったことで、上いも重は平年比107%となった。しかし、高温の影響により、でん粉価は平年よりも1.3ポイント低く、でん粉重は平年比100%であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目		男爵薯			コナユタカ		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
植付期	(月.日)	5.11	5.11	0	5.11	5.11	0
萌芽期	(月.日)	5.26	5.29	△ 3	5.29	6.01	△ 3
開花始	(月.日)	6.25	6.28	△ 3	6.28	7.04	△ 6
枯ちよう期	(月.日)	9.04	8.31	4	10.10	10.14	△ 4
茎長(cm)	(6月20日)	32.1	23.3	8.8	20.2	12.6	7.6
	(7月20日)	48	56	△ 8	78	81	△ 3
	(8月20日)	48	57	△ 9	101	103	△ 2
茎数(本/株)	(6月20日)	4.0	3.8	0.2	2.3	2.5	△ 0.2
	(7月20日)	5.1	4.3	0.8	2.5	2.7	△ 0.2
上いも重(kg/10a)	(8月20日)	5637	5028	609	4569	3850	719
	(9月20日)	6223	4899	1324	6573	5526	1047
でん粉価(%)	(8月20日)	14.1	15.6	△ 1.5	18.4	18.9	△ 0.5
	(9月20日)	13.5	15.2	△ 1.7	19.4	20.6	△ 1.2
でん粉重(kg/10a)	(9月20日)	-	-	-	1209	1085	124
上いも数(個/株)		13	10.3	2.7	8.8	8.2	0.6
上いも平均重(g)		107	109	△ 2	175	181	△ 6
上いも重(kg/10a)		6223	4899	1324	6856	6428	428
同上平年比(%)		127	100	27	107	100	7
でん粉価(%)		13.5	15.2	△ 1.7	20.1	21.4	△ 1.3
でん粉重(kg/10a)		-	-	-	1311	1310	1
同上平年比(%)		-	-	-	100	100	0

注) 平年値は前7か年中、平成30年(最凶)、令和3年(最豊)を除く5か年の平均

9) てんさい

作 況：不良

事 由：移植栽培の播種は、平年より2日早い3月22日に行った。以降、気温が高めに経過したため、育苗期間中の生育は非常に良好であった。移植は平年より2日早い5月2日に行った。土壌条件は適湿であったため、活着は良好であった。

直播栽培の播種は、平年より3日早い5月2日に行った。出芽期は平年より2日早い5月14日で、出芽揃いも良好であった。

その後、6月上旬にまとまった降雨があったものの、降水がほとんどない期間が長く、圃場は乾燥傾向であった。そのため、移植栽培では、生育が抑制された。一方、直播栽培では、乾燥の影響が少なく、生育は順調であった。7月上旬からの降雨のため、圃場の乾燥傾向は解消した。また気温が高く推移したため、生育は回復傾向となった。その後8月中

は、日中の気温が著しく高く、最高気温が30度を超えた日が多かったため、生育は抑制された。9月からは、降水量が多かったため、茎葉重、根重は回復が認められ、草丈、生葉数、茎葉重、根重および根周は、いずれも概ね平年並であった。

収穫は、平年より3日遅い10月23日に行った。

9月中旬まで高温多雨傾向であったことから、褐斑病は、最終的に平年より多い中程度の発生となった。根中糖分は、8月～9月の高温と褐斑病の影響のため、平年を下回った。根重は、降水量が十分であったため、ほぼ平年並であったが、糖量は平年を下回った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

表 その1

調査項目		移植						直播		
		アンジー			アマホマレ			アンジー		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期	(月・日)	3.22	3.24	△ 2	3.22	3.24	△ 2	5.02	5.05	△ 3
移植期	(月・日)	5.01	5.03	△ 2	5.01	5.03	△ 2	-	-	-
出芽期	(月・日)	-	-	-	-	-	-	5.14	5.16	△ 2
収穫期	(月・日)	10.23	10.20	3	10.23	10.20	3	10.23	10.20	3
草丈 (cm)	(5月20日)	6.5	6.8	△ 0.3	7.0	7.2	△ 0.2	-	-	-
	(6月20日)	19.2	22.9	△ 3.7	20.3	23.9	△ 3.6	16.7	13.8	2.9
	(7月20日)	55.2	53.7	1.5	59.8	54.7	5.1	55.7	51.7	4.0
	(8月20日)	62.4	58.9	3.5	63.0	61.3	1.7	63.9	60.2	3.7
	(9月20日)	64.0	60.4	3.6	64.3	63.7	0.6	69.0	62.3	6.7
生葉数 (枚)	(5月20日)	5.7	6.6	△ 0.9	4.8	5.2	△ 0.4	-	-	-
	(6月20日)	13.2	12.4	0.8	11.7	11.4	0.3	10.4	8.7	1.7
	(7月20日)	23.5	21.6	1.9	24.1	21.0	3.1	22.1	19.2	2.9
	(8月20日)	27.6	27.4	0.2	26.3	25.5	0.8	27.9	26.0	1.9
	(9月20日)	27.6	29.7	△ 2.1	29.3	27.8	1.5	30.3	28.0	2.3
茎葉重 (g/個体)	(5月20日)	1.0	1.2	△ 0.2	1.1	1.2	△ 0.1	-	-	-
	(6月20日)	34	76	△ 43	37	67	△ 30	21	14	7
	(7月20日)	459	497	△ 38	564	520	44	423	404	19
	(8月20日)	684	764	△ 80	728	786	△ 58	695	719	△ 24
	(9月20日)	543	740	△ 197	827	740	87	727	713	14

注1) 平年値は前7か年中、令和3年(最豊)平成28年(最凶)を除く5か年の平均。

表 その2

根重 (g/個体)	(6月20日)	9	15	△ 6	13	17	△ 4	3	1	2
	(7月20日)	250	264	△ 14	248	256	△ 8	184	137	47
	(8月20日)	607	726	△ 119	581	724	△ 143	564	583	△ 19
	(9月20日)	953	1037	△ 84	1008	1004	4	955	843	112
根周 (cm)	(7月20日)	22.2	23.2	△ 1.0	21.2	22.7	△ 1.5	20.5	18.6	1.9
	(8月20日)	30.1	33.7	△ 3.6	29.4	32.2	△ 2.8	30.2	30.8	△ 0.6
	(9月20日)	36.8	38.0	△ 1.2	36.7	37.0	△ 0.3	37.0	35.0	2.0
根中糖分 (%)	(9月20日)	14.68	16.34	△ 1.66	14.64	16.79	△ 2.15	14.34	16.64	△ 2.30
茎葉重(kg/10a)	(収穫期)	3510	5108	△ 1598	4140	5873	△ 1733	3300	5091	△ 1791
根 重(kg/10a)	(収穫期)	7517	7595	△ 78	6879	7024	△ 145	6987	6503	484
同上平年比 (%)		99	100	△ 1	98	100	△ 2	107	100	7
根中糖分 (%)	(収穫期)	15.67	18.14	△ 2.47	16.44	18.74	△ 2.30	15.94	18.34	△ 2.40
同上平年比 (%)		86	100	△ 14	88	100	△ 12	87	100	△ 13
糖量(kg/10a)	(収穫期)	1178	1377	△ 199	1130	1316	△ 186	1113	1192	△ 79
同上平年比 (%)		86	100	△ 14	86	100	△ 14	93	100	△ 7

注1) 平年値は前7か年中、令和3年(最豊)平成28年(最凶)を除く5か年の平均。

10) 牧 草 (チモシー)

作 況 : 不良

事 由: 1番草: 萌芽期は平年より1日早い4月18日で、冬損は認められなかった。5月下旬以降の気温が平年並からやや高く推移したことから、1番草の出穂始および出穂期はそれぞれ平年より1日早い6月9日および6月13日であり、刈取時の出穂程度は平年より高かった。一方で、5月下旬および6月中旬の降水量が少なかったことから草丈は平年より14cm低く、乾物収量も平年比77%と低収であった。

2番草: 収穫は平年より2日遅い8月7日に行った。7月下旬以降は高温で経過したも

の、8月上旬にかけて降水量が多かったことから2番草の乾物収量は平年比116%と多収であった。しかし、1番草と2番草の合計乾物収量は平年比88%に止まった。

3番草: 収穫は平年より2日遅い10月4日に行った。9月上旬以降の降水量は平年より多く、3番草収穫時の草丈は平年並の38cmであったものの、乾物収量は平年比86%と低収であった。また、1～3番草の合計乾物収量は平年比87%と低収であった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

品種名 調査項目		なつちから		
		本年	平年	比較
萌芽期	(月. 日)	4. 18	4. 19	△ 1
冬損程度		1. 0	1. 0	0. 0
被度 (%)	(5月20日)	100	100	0
	2番草再生時	100	100	0
出穂始 (月. 日)		6. 09	6. 10	△ 1
出穂期 (月. 日)		6. 13	6. 14	△ 1
出穂程度	1番草	7. 5	6. 8	0. 7
節間伸長程度	2番草	4. 5	4. 7	△ 0. 2
収穫日	1番草	6. 15	6. 16	△ 1
	2番草	8. 07	8. 05	2
	3番草	10. 04	10. 02	2
倒伏程度	1番草	1. 0	1. 0	0
病害罹病程度	1番草	1. 0	1. 0	0
	2番草	2. 0	2. 6	△ 0. 6
	3番草	2. 8	2. 7	0. 1
草丈 (cm)	(5月20日)	41	41	0
	(6月5日)	66	76	△ 10
	1番草	83	97	△ 14
	2番草再生時	33	39	△ 6
	2番草	76	66	10
	3番草再生時	31	35	△ 4
	3番草	38	39	△ 1
生草収量 (kg/10a)	1番草	1, 651	2, 544	△ 893
	2番草	1, 316	837	479
	1+2番草計	2, 967	3, 381	△ 414
	3番草	349	509	△ 160
	合 計	3, 316	3, 890	△ 574
乾物率 (%)	1番草	25. 6	22. 3	3. 3
	2番草	18. 4	26. 3	△ 7. 9
	3番草	30. 6	26. 3	4. 3
乾物収量 (kg/10a)	1番草	423	549	△ 126
	同上平年比 (%)	77	100	△ 23
	2番草	242	208	34
	同上平年比 (%)	116	100	16
	1+2番草計	664	757	△ 93
	同上平年比 (%)	88	100	△ 12
	3番草	107	124	△ 17
	同上平年比 (%)	86	100	△ 14
	合 計	771	882	△ 111
	同上平年比 (%)	87	100	△ 13

注 1) 平年値は前 7 か年のうち平成 28 年（最豊）、令和 3 年（最凶）を除いた前 5 か年の平均値。

2) 冬損程度は 1: 無または微～9: 甚。出穂程度および節間伸長程度は 1: 無～9: 極多。

倒伏程度および病害罹病程度は 1: 無または微～9: 甚。病害は主に斑点病。

付表1 各作物の耕種概要

作物名	一区面積 (㎡)	反復	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	一株 本数	播種粒 数 (粒/ ㎡)	播種量 (kg/10 a)	株数 (株/10a)
1. 秋まき小麦	5.4	4	ひまわり	20.0	ドリ ル	—	255	—	—
2. 春まき小麦	6.0	4	緑肥大豆	30.0	条播	—	340	—	—
3. とうもろこし	11.2	3	緑肥えん麦	75.0	17.8	1	—	—	7,491
4. 大 豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	—	—	8,333
5. 小 豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	—	—	8,333
6. 菜 豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	—	—	8,333
7. ばれいしょ	37.8	3	緑肥えん麦	75.0	30.0	1	—	—	4,444
8. てんさい	39.6	3	緑肥野生 えん麦	60.0	23.8	1	—	—	7,003
9. 牧 草 (チモシー)	2.7	4	緑肥えん麦	30.0	条播	—	—	2.0	—

付表2 各作物の耕種概要

作物名	施肥量(kg/10a)						備考
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥	その他	
1. 秋まき小麦	5.6	17.5	7.0	3.5	—	起生期追肥 N: 5.0	2年目草地 年間3回分施
2. 春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0	—		
3. とうもろこし	14.0	22.0	12.0	4.0	3,000	炭カル:150	
4. 大 豆	1.8	15.0	7.8	3.0	—		
5. 小 豆	4.0	20.0	11.2	4.0	—		
6. 菜 豆	4.0	20.0	11.2	4.0	—		
7. ばれいしょ	8.0	20.0	14.0	5.0	—		
8. てんさい	15.0	30.0	12.3	6.8	—		
9. 牧 草 (チモシー)	15.0	15.0	15.0	3.0	—	〔 造成時 炭カル:200 ダブリン:30〕	

Ⅲ 試験研究および地域支援活動の概要

1 研究部の概要

1) 麦類に関する試験

麦類畑作グループ（麦類）は、秋まき小麦および春まき小麦の新品種育成やそれに係わる栽培試験、二条大麦の適応性検定試験を実施している。

小麦では、「小麦品種開発事業」、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進」等の各試験研究課題により高品質で耐病性および穂発芽耐性に優れた品種の育成を進めている。「優良品種決定調査」では秋まき小麦の「北見99号」、「北見100号」を、春まき小麦では「北見春85号」「北見春86号」を供試し、「北見100号」「北見春85号」は試験中止とした。秋まき小麦「北見102号」春まき小麦「北見春87号」を新配付系統とした。「春まき小麦の品種選定試験」ではホクレン農総研育成の「HW10号」等について適応性を検討した。

二条大麦では、「二条大麦の品種選定試験」により適応性検定試験を行い、「札育10号」と「札育11号」を試験中止とし、「札育12号」、「札育13号」を新配布系統とした。

2) 畑作物に関する試験

麦類畑作グループ（畑作）は豆類やてん菜などの畑作物の新品種育成や品種選定、栽培法改善試験、除草剤などの資材試験を実施している。

豆類では、「畑作物の地域適応性検定試験」により、大豆、小豆および菜豆における有望系統の地域適応性評価を進めている。大豆では、場内試験にて「十育280号」および十系系統11点（系統適応性検定試験）を供試した。小豆では、場内試験にて「十育186号」を供試した。菜豆では、場内試験にて「十育B87号」および「十育E14号」を供試した。

てん菜では、「てん菜輸入品種検定試験」として、民間育成の9系統について優決相当の生産力試験とそう根病抵抗性検定試験を実施し、抽苔耐性検定試験、斜里の現地試験ではそのうちの3系統について実施した。供試9系統のうち現地継続検討が4系統、廃棄が5系統

である。

3) ばれいしょに関する試験

馬鈴しょ牧草グループ（馬鈴しょ）は、でん粉原料用、加工用等の新品種育成を中心に、栽培試験や資材試験を実施している。

ばれいしょ新品種育成に関する試験は、「馬鈴しょ品種開発事業Ⅱ」において、安定多収な品種の育成を進めている。また、「ばれいしょの輸出を促進するジャガイモシストセンチュウ類低減・管理技術の開発」では、ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性を有するでん粉原料用品種の育成、「国内生産力の強化を図るための穀物等品種の開発」では、病虫害複合抵抗性を有するでん粉原料用品種の育成、ホクレンとの共同研究「トヨシロ」置き換えの馬鈴しょ品種開発強化」では、熟期の早い加工用品種育成の強化に取り組んでいる。

育種選抜効率の向上に関する試験は、「早期収穫適性が優れるでん粉原料用馬鈴しょ多収品種の開発促進」において、収量安定性の高い有望系統開発を強化している。「センチュウ類およびYウイルス抵抗性馬鈴しょ品種の開発強化と特性検定試験」では育成3年目の系統について、ジャガイモシストセンチュウ、ジャガイモYウイルス、ジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性遺伝子を対象にしたDNAマーカーによる選抜を実施している。

育種選抜における品質の向上に関する試験は、「でん粉原料用馬鈴しょにおける高品質でん粉系統の選抜強化」、「長期貯蔵向けポテトチップ用馬鈴しょ系統の選抜強化」において、でん粉品質並びにチップ加工適性が優れる品種の開発促進を行っている。

育種選抜における耐病性の向上に関する試験は、「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発促進」および「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の選抜強化」において、前出の課題と合わせて耐病虫性（ジャガイモシストセンチュウ、ジャガイモシロシストセンチュウ、そうか病、疫病、Yウイルス病）に優れる品種の開発促進を進めているとともに、特性検定試験を実施している。

「優良品種決定調査」では、加工用3系統およびでん粉原料用1系統について検討した。加工用の「北育33号」と「北育34号」は耐病性および加工適性が優れることから次年度も品種化に向けた試験を継続する。加工用の、「北育29号」については萌芽性、でん粉原料用の「北育32号」は、収量性に欠点が認められいずれも試験中止とした。「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」では、民間育成3系統「CP15」、「CP16」及び「CP18」について生産力検定並びに病害虫抵抗性検定を行ったが、収量性や塊茎品質における欠点が明らかになり、いずれも試験中止とした。

品種特性の解明に関する試験では、「生食用馬鈴しょ「ゆめいころ」の普及促進に向けた生育特性および食味の評価」において、実需者や消費者の品種選択や商品開発に向けた情報としての特徴を整理している。

4) 牧草・飼料作物に関する試験

馬鈴しょ牧草グループ（牧草）では、チモシー新品種育成試験を中心に、牧草・飼料作物の地域適応性評価、栽培試験および資材試験を実施している。

「チモシー品種開発事業Ⅱ」では、収量性、競合力、耐倒伏性、飼料成分、耐病性などの改良を目標として、チモシー有望系統の開発に取り組んでいる。また、ホクレンとの共同研究「飼料品質の向上に寄与するチモシー新品種の開発促進」では、早生育成2系統の地域適応性検定試験および特性検定試験を実施した結果を受けて、「北見36号」を北海道優良品種候補として提案し、その後認定された。さらに、（一社）日本草地畜産種子協会との共同研究「道内の多様な環境に適応するチモシー品種の開発」では、広域適応性早生2系統の採種試験および中生有望系統の生産力検定予備試験を実施した。民間受託試験「飼料作物品種比較試験」および「飼料作物品種比較試験（ペレニアルライグラス品種・系統の特性検定調査）」では、牧草5草種とサイレージ用とうもろこしの品種比較試験を実施した。「国内飼料生産力強化のための飼料作物品種の開発」では、初期生育性、耐暑性が既存品種より優れるチモシーの有望系統育成のための試験を行った。

また、職員研究奨励事業として、「チモシーの耐乾燥性検定法の開発」に取り組んだ。

5) 栽培環境に関する試験

生産技術グループ（栽培環境）は、土壌肥料（資材試験を含む）および環境保全に関する研究を実施している。本年度は、「早期出荷向けたまねぎ（SN-3）における品質向上技術の開発」が終了課題となり、委託元の訓子府町に試験結果を報告した。

継続課題として、「リモートセンシングと圃場情報を活用した干湿害多発農地の診断手法の開発」（中央農試、十勝農試と共同）、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第3期）2）（5）新しい選抜法を活用した収量性の選抜強化」（麦畑Gと共同）、「同3）（1）①春まき小麦における肥料価格変動に応じた適正施肥量の設定」（中央農試、上川農試と共同）、「畑作物に対する肥効調節型肥料の施用効果試験」（上川農試、十勝農試と共同）、「環境保全型有機質資源施用基準設定調査」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試と共同）、「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試と共同）、「農作物病害虫診断試験②生理障害診断試験」、「道営農業農村整備事業等に係る土壌調査」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、酪農試、**花野菜セ**と共同）を実施した。なお、昨年度実施した「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第3期）3）（1）春まき小麦新品種候補「HW8号」の高品質多収栽培技術の開発」（中央農試、上川農試、十勝農試と共同）は、「HW8号」の優良品種提案が見送られたため、「同3）（1）①春まき小麦における肥料価格変動に応じた適正施肥量の設定」（中央農試、上川農試と共同）として実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「国内向けBNI強化小麦の開発の加速化」、「革新的技術導入による地域支援－北見地域における大豆狭畦栽培技術の現地実証－」である。単年度試験として、農業研究推進事業「肥料価格変動に応じた適正施肥量設定に向けた初動研究」を実施した。

6) 病害虫に関する試験

生産技術グループ（病虫）は、畑作物および園芸作物の病害虫防除対策試験、馬鈴しょのそうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウの抵抗性評価、農作物病害虫診断試験、新農業資材実用化試験（新農業効果査定試験）および病害虫発生予察事業を実施している。

本年度は、「農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験」の緊急対策試験で実施していた「だいこんのヒメダイコンバエの防除対策」を「だいこんのヒメダイコンバエの被害軽減対策」として取りまとめ、また「赤さび病の適正防除による秋まき小麦「きたほなみ」の多収技術の確立」（中央農試と共同）を「多発傾向に対応した秋まき小麦の赤さび病防除技術」として取りまとめ、北海道農業試験会議（成績会議）に提出し、令和6年指導参考事項に採択された。

継続課題として、「病害虫発生予察調査」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野菜セと共同）、「農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験」（中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野菜セと共同）、「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発促進」（馬鈴しょ牧草Gと共同）、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の選抜強化」（疫病菌の接種による実生個体選抜、塊茎腐敗抵抗性検定、馬鈴しょ牧草Gと共同）、「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」（そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定、馬鈴しょ牧草G、中央農試、上川農試、十勝農試、北農研と共同）、「ばれいしょの輸出を促進するジャガイモシストセンチュウ類低減・管理技術の開発3．捕獲作物および抵抗性作物を活用したPCN防除技術の開発」（北農研と共同）を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「センチュウ類およびYウイルス抵抗性馬鈴しょ品種の開発強化と特性検定試験」（ジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定、馬鈴しょ牧草G、中央農試と共同）、「テンサイ褐斑病抵抗性”かなり強”を超える系統に対する防除体系の

開発」（十勝農試、中央農試と共同）である。

単年度試験として、農業研究推進事業「気象・画像データを用いた病害虫防除の効率化」を実施した。

7) 地域支援活動

オホーツク地域農業支援会議では、技術普及室、網走農業改良普及センター、オホーツク総合振興局農務課とともに、事務局会議3回、五者会議（普及センター本所にて、対面開催）ならびに地域関係者会議（網走総合振興局でWeb開催と対面のハイブリット開催）を開催し、地域ニーズ（本年度ニーズ3課題、過年度ニーズ7課題）の現地の聞き取り調査や対応・ニーズ元への回答等を行った。

プロジェクト課題は、今年度から「大豆間作小麦栽培の対応」について取り組むこととなり、試験ほ場の設置と越冬前調査を行った。また、個別の地域要望や普及センターからの支援要請等については研究部各グループと技術普及室が連携して対応を行った。

2 技術普及室の活動

1) 専門項目に関する普及センターの支援

技術的な問い合わせなどへの対応の他、普及センターからの支援要請に基づいたテーマについて対応した。

耕種（水稻・畑作・園芸）については、①稲作部会研修にかかる支援、②「きたゆきもち」安定確収マニュアル作成に係る支援、③畑作部会研修にかかる支援、④秋まき小麦の安定生産に向けたは種時期の再検討、⑤管内園芸部会研修の支援、⑩園芸担当者OJT研修の支援を行った。

畜産については、畜産部会研修にかかる支援（網走農業改良普及センターの地域課題解決研修として、搾乳ロボットにおける生菌数の調査方法及び乳質改善対策の手法）を他担当普及室へ要請し、研修対応した。また、管内TMRセンター連絡会の構成メンバーとして、組織の活性化に貢献した。

植物保護については、①ニンジン黄化病に対する効果的な防除方法の確立、②秋まき小麦赤さび病、ふ枯病、葉枯症状対策試験設置

に係わる調査方法の習得及び試験研究との情報交換、③種子馬鈴しょのジャガイモシストセンチュウ検診技術の向上、④だいこん栽培におけるヒメダイコンバエの効果的な防除法の支援(釧路・根室)などに関する情報提供および助言を行った。

土壌肥料については、土壌物理性調査(三相分布測定)に係る調査機材の貸与を支援した。

経営については、農産物生産費集計システムの活用について支援した。

人材育成については、採用3年目までの新任普及職員に対する研修支援を行った。また、畜産担当新任職員について、他担当普及室へ支援を要請して対応した。

GAPの取組みについては、農業者を対象とした研修会の企画に関する支援を行った。

病害虫や自然災害等の緊急事態に対する対応や突発性病害、生理障害の診断および研究要望事項のうちで既往の成果があるとされたものに対する支援など多岐にわたった。

2) 調査研究の実施

調査研究は次の3課題である。

1つ目は、秋まき小麦の安定生産に向けたは種時期の再検討である。

網走市および大空町東藻琴では、近年、は種作業が地域のは種適期よりも早まる傾向があり、越冬前茎数が過多となっていた。過繁茂になることで起生期以降の追肥管理を難しくさせ品質や収量に影響を及ぼしていることから、地域の実情と近年の気象に対応したは種時期の見直しが必要であった。なお、本調査研究は、支援要請と併せ支所と連携した活動とした。

○気象データの活用

網走支所では、これまで網走アメダスの平年値を使って、支所管内全体のは種時期を提案していた。しかし、より詳細な地区別の気温を得るために、農研機構が開発・運営するメッシュ農業気象データシステム(以下、メッシュデータ)を利用し地区ごとの適期を設定した。

○地区ごとの検証とは種適期の提案

積算温度と越冬前の生育を各地点ごとに追跡し経過を観察した。越冬後も追跡を継続し、

適期は種の有用性を確認した。

農業者に示す際には、早まきのリスクも整理し、農業者の理解が深まるような提案につなげた。

○農業者の変化

農業者のは種作業時期は、地域ごとの適期に行われるようになってきており、農業者の理解や安定生産に向けた意欲の醸成にも寄与した。

2つ目は、「普及組織による法人化の支援手順について」である。

○取り組みの背景

高齢化・担い手不足により1戸当たり規模が拡大して行く中、地域では普及組織に対し共同作業化・法人化への支援が求められている。このため、普及組織が地域において法人化を支援する手順を整理する必要があった。

○取り組み内容と成果

法人設立の流れとして、①設立の検討、②定款の作成、③設立登記、④農地の権利移動・設定、⑤資産・負債の権利移動、⑥税務署等への届出、⑦就業規則の作成があり、設立後も運営が軌道に乗るよう、関係機関による側面的な支援が必要となる。

この中で、普及組織が支援すべき事項をフロー図として整理した(図1)。

①について、普及組織はJA・役場と連携し、重点地区等も活用しながら、集落ぐるみで話し合える場を設定し、合意形成を支援する事が求められる。

話し合う内容としては、第1段階として「集落の現状認識と法人化(組織化)の意義について理解を進める」ことがある。具体的には、TN法第1ステップ等により集落の現状や問題点の理解促進、将来の農地管理の在り方、集落営農の組織化・法人化についてメリット・デメリット、農作業の担い手、収益の配分方法等について話し合う。

次に、第2段階として「経営方針の検討と作成」を支援する。TN法第2ステップやSWOT分析、マンダラート等により法人(組織)の目的、経営方針、経営安定化のための取組内容、農地利用集積の方向等について、具体的に検討する。

話し合いの中で、法人の選択(農事組合法人・株式会社・合同会社)、構成員(出資者)

の決定、代表・役員の決定、事業内容（作付品目含む）の決定、事業規模の決定、給与・報酬の決定、作業体系の決定、厚生年金等の方針の決定、資金繰りの確認等を行なうが、この時に、普及組織は営農ナビ等を活用した経営シミュレーションを行ない、第三者の立場から客観的データを示すことにより、住民の意思決定を側面的に支援する。

設立に係る②～⑥については、税理士や社労士・行政書士等専門家の支援を受ける方がベターと思われることから、普及組織は、相談する場づくり等コーディネーターとしての役割が望まれる。また、⑦について普及組織は、農業委員やJA営農担当者と連携し、法人の構成員やリーダーとの合意形成を図りながら作成する。

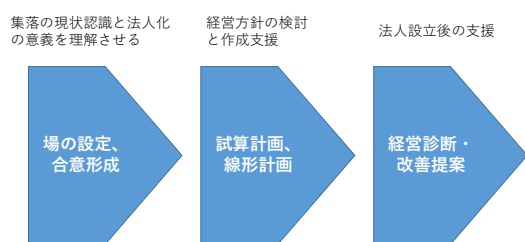


図1 法人化における普及組織の支援イメージ

次に、設立後の支援として、普及組織は経営診断・分析により、技術的に踏み込んだ改善計画を提案することが必要である。経営診断・分析には道立農試が開発した3ツール（「農産物生産費集計システム（H23・24普及推進）」、「青色申告決算書解析ツール（H26・28普及推進）」、「組勘データを見える化するツール（H23普及推進）」）が既存データをそのまま利用できるという点で簡便であり、改善計画の策定にはXLPを活用した線形計画法や営農ナビ等を活用した試算計画法が便利である。

さらに、人材定着を支援するには、その法人における課題の見える化と取組の優先順位づけが有効であるが、この際、パートや従業員に対する満足度調査が必要となるため、農研機構等から出されている各支援ツールが活用できる。

以上、支援手順について整理した。

3つ目は、「ニンジン黄化病に対する効果的防除方法の検討」である。

ニンジン黄化病は、ニンジンフタオアブラムシが媒介するウイルス病である。清里支所管内では、輪作体系上、にんじんが重要な作物として位置づけられているが、令和3年頃から本病の発生が拡大し、収量への影響が懸念されていた。そこで、清里支所が実施する発生消長調査と防除試験を元に、試験場生産技術Gと連携した普及センターとの情報交換会を行いながら、以下の事項について検討した。

○黄色水盤による発生消長の確認

斜里町内のにんじんほ場に黄色水盤を設置し、ニンジンフタオアブラムシの飛来状況を確認した。2カ年の調査から、有翅虫のほ場への飛来は5月中～下旬に確認され、5月6半旬に1回目の発生ピークとなった。その後、ほ場内で増殖し6月下旬～7月上旬に2回目の発生ピークがあった。

ニンジン黄化病の感染時期について、6月下旬のサンプリングによるウイルス検定では、感染を確認できなかったが、7月中旬では葉の黄化や赤化症状の発生とともに、ウイルスの感染が確認された。このことから、ニンジンフタオアブラムシ有翅虫は、1回目の発生ピークである5月下旬時点ではウイルスを保毒しておらず、その後ほ場で増殖した有翅虫がノラニンジン等の感染源で保毒し、2回目の発生ピークとなる6月下旬～7月上旬にかけてほ場のにんじんに寄生し、7月中旬以降に感染を拡大させる可能性が高いことが推察された。

なお、前年は8月上旬に3回目の発生ピークがあったが、本年は7月以降極端な高温で経過したため、7月中旬以降は発生量が減少したと考えられる。

○薬剤による防除時期の検討

ニンジンフタオアブラムシの効果的な薬剤防除時期を検討するとともに、収量性への影響を確認した。2カ年の結果から、無防除区では黄化病の発病株率が高く、製品収量が低下しており、本病が収量性に影響を及ぼしていることが確認できた。一方で、生育初期のは種30日後に1回目、その7日後に2回目の

茎葉散布（殺虫剤）を行うことで発病株率が低減し、収量性が向上する結果であった。ただし、今回検証した作型は後期作型（7月中旬は種、露地）であり、被覆作型（4月は種）や中期作型（5～6月は種）においては現時点で未検討である。

○ニンジン黄化病の防除対策

これまで調査したニンジンフタオアブラムシの発生消長や防除試験の結果を踏まえ、各作型におけるニンジン黄化病の防除対策を次の通り整理した。

①被覆作型

越冬後には場に飛来した有翅虫は、ウイルスを保毒していないが、7月中旬にはほ場のニンジンで感染が確認されている。したがって、被覆作型では被覆除去後速やかに薬剤防除を行う。

②中期作型・後期作型

特に中期作型では、生育の初期段階で7月中旬の感染危険期に遭遇するため、生育初期のは種30日後に1回目、その7日後に2回目の薬剤防除を行う。

③作型ごとの薬剤防除と合わせて、本病害の感染源となるほ場周辺のノラニンジン等は除草に努める。

3) 地域農業技術支援会議の活動

オホーツク地域農業技術支援会議の活動は、要望のあった10課題（新規3課題、過年度継続7課題）に対して、現地聞き取り調査を4カ所で行った。五者会議は対面開催、地域関係者会議は初のハイブリッド方式での開催となった。

また、「大豆間作小麦栽培への対応」について、行政・普及・試験研究が連携して対応するプロジェクト課題として位置づけ、試験ほの設置や病害調査によるデータ収集を行なうことし、越冬前調査を実施した。

4) 農業試験場における普及指導員の研修実施

例年開催していた高度専門技術研修（畑作）はWeb方式による開催となった。また、高度専門技術研修（植物保護）は未開講だった。

IV 研究発表および普及事項

1 研究発表

1) 研究論文

- 池谷 聡. テンサイ新品種「ボヌール」の特性. 北海道立総合研究機構農業試験場集報 108 : 37-41 (2024).
- 池谷 聡. テンサイ新品種「バラトン」の特性. 北海道立総合研究機構農業試験場集報 108 : 43-47 (2024).
- 品田博史・藤田涼平・松永 浩・和崎俊文・大波正寿・青山 聡・江 成彦・池谷聡・萩原誠司・中山 輝・鈴木千賀・田村 元・相馬ちひろ・池田幸子・小野寺鶴将. 早生生食用のジャガイモシストセンチュウ抵抗性バレイショ新品種「ゆめいころ」の育成. 育種学研究 25 : 158-165 (2023).
- 森 万菜実・小松 勉. 北海道で発生したコムギなまぐさ黒穂病菌のリアルタイムPCRによる土壌からの検出と定量. 北日本病害虫研究会報 74 : 26-3 (2023).
- 森 万菜実. 北海道で採取したリンゴ黒星病菌のピリベンカルブ水和剤に対する感受性. 北日本病害虫研究会報 74 : 32-34 (2023).
- 石倉 究・笛木伸彦・原 圭祐・丹羽勝久・瀬下 隆. 衛星画像と地形情報を活用した圃場内の土壌物理性不良エリアの評価 I. 保水性不良. 日本土壌肥料学雑誌 95 : 11-20 (2024).
- 石倉 究・笛木伸彦・原 圭祐・丹羽勝久・瀬下 隆. 衛星画像と地形情報を活用した圃場内の土壌物理性不良エリアの評価 II. 排水性不良. 日本土壌肥料学雑誌 95 : 21-29 (2024).

2) 口頭発表

- 大西志全. Wheat breeding in Hokkaido, northern part of Japan: Improvement of pre harvest sprouting tolerance, yield, and food processing. 第15回国際穂発芽シンポジウム(2023.10.4-5).
- 斉藤涼介・其田達也・木内 均・佐藤 優美・大西 志全・山口 直矢・石川 吾郎・森田 耕一. 北見農試秋まき小麦育成系統の育種データを用いた重要な農業形質と一次加工適性に関するゲノムワイドアソシエーション解析. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会令和5年次講演会(オンライン開催, 2023.12.2).
- 相馬ちひろ・阿出川さとみ・大西志全・神野裕信・鈴木孝子. 異なるコムギ萎縮病抵抗性QTLが及ぼす影響. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会令和5年次講演会(オンライン開催, 2023.12.2).
- 鴻坂扶美子・大西志全・黒崎英樹. ダイズおい化病の発病率に及ぼす気温の影響. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会令和5年次講演会(オンライン開催, 2023.12.2).
- 大西志全. 気象変動が小麦の栽培と育種に及ぼす影響. 北海道畑作研究懇話会(2024.3.2).
- 大西志全・堀川謙太郎・森田 耕一・相馬ちひろ・佐藤優美・其田達也. 知コムギ赤かび病抵抗性 QTL の新規アレルはコムギ赤かび病抵抗性母本「北系 1932」および「北系 1976」の育成において重要な役割を果たした. 日本育種学会第145回講演会(2024.3.16-17).
- 林 和希・斉藤涼介・其田達也・島田翔太・大西一光・堀川謙太郎・佐藤 圭・大西志全. 北海道コムギ育種における半矮性遺伝子Rht8の有用性の検証. 日本育種学会第145回講演会(2024.3.16-17).
- 池谷 聡. テンサイ品種における直播収量性評価の試み. てんさい品種における直播収量性の試み. てん菜研究会第21回技術研究発表会 (2023.7.19).
- 足利和紀. チモシーの初期生育性における播種翌年農業形質との関係性と種子重選別の影響. 北海道畜産草地学会第12回大会 (2023.12.9-12.10).
- 足利奈奈・林 和希・斉藤涼介・佐藤三佳子・道満剛平・来嶋正朋・平山裕治・大西志全. CIM

- MYTの遺伝資源を利用して育成した多収春まきコムギ系統「北見春83号」. 日本育種学会・作物学会北海道談話会（オンライン開催, 2023. 12. 2）.
- 品田博史・山口直矢・白澤健太. バレイショにおけるゲノム解析を用いた育種選抜の可能性. 日本育種学会（2024. 3. 16-17）.
- 佐々木太陽・小倉玲奈. ヒメダイコンバエの発育零点と有効積算温度の解明と黄色水盤による成虫の誘殺消長. 第77回北日本病害虫研究発表会（2024. 2. 21-22）.
- 三和優吾・板垣英祐・酒井 治・大西志全・其田達也・笛木伸彦. 秋まき小麦の各生育期節におけるNDVIと子実重の関係 収量性の簡便かつ非破壊的に評価する手法の開発を目指して. 土壤肥料学会北海道支部会（札幌市）（2023. 12. 8）.
- 板垣英祐・田中常喜・岡元英樹・二門 世・有田敬俊・大塚省吾・笛木伸彦. 窒素施肥量が地下茎型イネ科雑草の収量と水溶性炭水化物含量に及ぼす影響. 日本土壤肥料学会（愛媛県松山市）（2023. 9. 12-14）.
- 板垣英祐・田中常喜・岡元英樹・二門 世・有田敬俊. 窒素施肥量が地下茎型イネ科雑草とチモシーの草高と葉色に及ぼす影響. 日本土壤肥料学会北海道支部会（札幌市）（2023. 12. 8）.
- 笛木伸彦・井上明香里・早川 敦・高橋 正. 硝酸化成活性が低かった水田転換畑台地土壌の粘土鉱物組成. 日本土壤肥料学会（愛媛県松山市）（2023. 9. 12-14）.
- 笛木伸彦・田中一生. 過去の無リン無カリウム試験データの再評価(1)－北海道の水稲長期連用試験の例－. 日本土壤肥料学会北海道支部会（札幌市）（2023. 12. 8）.
- 桑原 萌・小倉玲奈・田澤暁子・杉山 裕・五十嵐俊成・笛木伸彦. 早期出荷向け道産タマネギの収穫前進技術. 日本土壤肥料学会（愛媛県松山市）（2023. 9. 12-14）.
- 桑原 萌・板垣英祐・笛木伸彦. 多収早生たまねぎ「SN-3」における皮硬度および球形質の特徴. 日本土壤肥料学会北海道支部会（札幌市）（2023. 12. 8）.
- 田中一生・添島 均. 北海道の水稲における窒素施肥量と登熟期間の土壌水分が胴割粒発生に及ぼす影響. 日本作物学会第256回講演会（2023. 9. 14）.
- 田中一生・添島 均. 北海道の水稲品種における胴割粒の胚乳細胞内アミロプラスト及びデンプン粒の蓄積構造. 日本作物学会第257回講演会（2024. 3. 29）.

3）専門雑誌記事

- 大西志全. 北海道初の菓子用秋まき小麦品種「北見95号」（ブランド名「北海道白」）. 米麦改良1月号 4-6（2024）.
- 池谷 聡. 褐斑病が極めて強いてんさい新品種「カーベ8K839K」の特性. 農家の友6月号 40-41（2023）.
- 池谷 聡. 4病害抵抗性で多収のてんさい新品種「プロテウス」の特性. 農家の友6月号 42-43（2023）.
- 池谷 聡. 近年のてん菜品種の動向. 砂糖類・でん粉情報11月号 49-60（2023）.
- 池谷 聡. なるほど新技術 てん菜新品種 「カーベ8K839K」. ニューカントリー 1月号 88-89（2024）.
- 池谷 聡. 令和5年産てん菜の生産実績とその要因について. てん菜だより第11号（北海道農産協会） 2-4（2024）.
- 飯田憲司. チモシー新品種「北見36号」. 北農 91巻2号 15-16（2024）.
- 高畠聡史. とうもろこし（サイレージ用）「P7948」. 北農 90巻第2号 52-53（2023）.
- 高畠聡史. とうもろこし（サイレージ用）「P7948」. 農家の友 7月号 40-41（2023）.
- 高畠聡史. サイレージ用とうもろこし「P7948」の特性. デーリィマン 3月号 94-96（2024）.
- 高畠聡史. チモシー極早生品種「センブウ」の特性と活用. 農家の友 3月号 25-27（2024）.
- 森万菜実. 薬剤耐性菌発生に対応したリンゴ黒星病防除法. ニューカントリー 8月号 22-24（2023）.

- 森万菜実．これからのリンゴ黒星病防除．農家の友 10月号 45－47 （2023）
- 佐々木太陽．インファロー散布を活用したばれいしょ害虫の防除法．ニューカントリー 10月号 74－75 （2023）
- 佐々木太陽．植え付けと同時に防除！インファロー散布の効果は？．農家の友 11月号 44－46 （2023）

4）著編書、資料

- 大西志全．安定生産可能でパンの食感・風味などに特徴のあるパン用小麦系統の研究．公益財団法人飯島藤十郎記念食品科学振興財団2022年度年報第38巻 474-478(2023)．
- 片山正寿．令和5年度 明日の豆作り．公益財団法人日本豆類協会 第3章_10 （2023）．
- 浅田洋平．豆類の病虫害．明日の豆作り．公益財団法人日本豆類協会 96-120 （2023）．

5）新聞記事

- 品田博史．馬鈴しょの高温被害対策．日本農業経済新聞(2024.2.14))．
- 森万菜実．薬剤耐性菌の発生に対応したリンゴ黒星病の防除方法について．農業共済新聞 （2023.12.6）．
- 佐々木太陽．インファロー散布を活用した馬鈴しょ害虫の防除法．農業共済新聞 （2023.6.7）．
- 佐々木太陽．ばれいしょの植付と同時に主要害虫（アブラムシ・ナストビハムシ）を防除！インファロー散布の効果とは？．農村ニュース「国際農業機械展in帯広特集号」．農村ニュース（2023.7.4）．

2 普及事項

1）普及奨励事項

- （1）チモシー新品種候補「北見36号」

2）普及推進事項

3）指導参考事項

- （1）だいこんのヒメダイコンバエの被害軽減対策
- （2）多発傾向に対応した秋まき小麦の赤さび病防除技術
- （3）除草剤
 - ①てんさい（移植）およびてんさい（直播）に対する除草剤「MBH-2003水和剤」の実用化
- （4）殺虫・殺菌剤
 - ①小麦の紅色雪腐病に対するイプコナゾール・ピリダクロメチル水和剤F（未登録）の効果
 - ②小麦の紅色雪腐病に対するインピルフルキサム・ピリダクロメチル水和剤F（未登録）の効果
 - ③小麦の紅色雪腐病に対するピリダクロメチル水和剤Fの効果
 - ④小麦の赤かび病（ニバーレ菌）に対するキャプタン・メトコナゾール水和剤DF（未登録）の効果
 - ⑤だいこんのヒメダイコンバエに対するダイアジノン粒剤（5％）（未登録）の効果

4）研究参考事項

なし

3 品種登録・特許申請

なし

V 研究企画・場運営・広報活動

1 諸会議

会 議 名	開催時期	場 所	参 加 者
定例庁内会議	R 5. 4. 12	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 5. 5. 17	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 5. 6. 7	農試講堂	場員
新規課題場内検討会	R 5. 6. 19	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 5. 7. 13	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 5. 8. 7	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 5. 9. 7	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 5. 10. 11	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 5. 11. 9	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 5. 12. 13	農試講堂	場員
現地委託試験成績検討会	R 5. 12. 1	訓子府町公民館 講堂(web併用)	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体
成績会議場内検討会	R 5. 12. 11	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 6. 1. 10	農試講堂	場員
設計会議場内検討会	R 6. 2. 9, 13	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 6. 2. 7	農試講堂	場員
定例庁内会議	R 6. 3. 11	農試講堂	場員
現地委託試験設計検討会	R 6. 3. 22	ウェブ開催・ 農試講堂(場員)	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体等

2 各種委員会

1) ほ場管理・施設等整備委員会

(1) 構成

委員長：岩崎暁生

事務局長：鳥越昌隆(ほ場管理)、古屋幸生(施設等整備)

委員：其田達也、池谷 聡、伊藤幸雄、品田博史、飯田憲司、板垣英祐、小倉玲奈、
田中一生、成田信幸

(2) 活動内容

① 委員会の開催

第1回：令和5年5月15日

- 1) 場内持ち込みサンプルについて
- 2) ジャガイモシストセンチュウの場内土壌検診
- 3) たまねぎの圃場移転について
- 4) 暗渠の底さらいについて
- 5) 防風林整備関係
- その他) 施設整備の要求について他

第2回：令和5年8月1日

- 1) たまねぎの育苗苗の購入について
- 2) 上川農試からの公開デー供試する土壌の譲渡について
- 3) 国際農研への土壌の提供について

- 4) 牧草、飼料用とうもろこし持ち込みについて
 - 5) 隔離圃場堆肥舎の修理について
- 第3回：令和5年12月20日
- 1) 令和6年度試験研究用備品要望に係る順位付けについて
 - 2) 共通経費執行残による備品整備について
- 第4回：令和6年1月10日
- 1) 場外からのサンプルの持ち込みについて
 - 2) 令和6年度作付け計画について
 - その他) 令和6年度のローテーションの確認

2) 業務委員会

(1) 構成

委員長：鳥越昌隆

委員：伊藤幸雄、林和希、池谷聡、和崎俊文、足利和紀、桑原萌、佐々木太陽

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和5年4月13日

- 1) 業務委員会開催要領
- 2) 業務委員会開催要領
- 3) 麦類畑作G（管理）業務体制
- 4) 室外契約職員体制
- 5) 室外契約職員のけが等の災害対応
- 6) 週間作業予定
- 7) 月間作業予定
- 8) 室外契約職員作業日誌対応
- 9) 機械契約職員対応
- 10) 勤務時間外における作業の休止、一時的な急速について
- 11) 作付威嚇
- 12) 雑草防除
- 13) 堆肥散布
- 14) 今月の予定

② 定例委員会：4月14日から10月27日まで原則として毎週木曜日に開催した。

- 1) 機械作業など週間作業計画および貨物車両使用計画
- 2) 室外契約職員週間作業計画

3) 図書・広報委員会

(1) 構成

委員長：宗形 信也

委員：大黒剣太、田澤暁子、小澤徹、石川圭大（図書連絡委員兼務）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和5年4月28日

- 1) 図書連絡委員の選任
- 2) 令和5年度定期刊行物購入計画の確認
- 3) 今年度業務内容の確認
- 4) その他（資料保管庫の利用，道総研OPACの運用開始）

② 第2回委員会：令和6年2月29日

1) 令和6年度定期刊行物購入計画の策定

③ 新着図書の案内、刊行物の配布、蔵書調査に対する回答等は随時実施

4) システム委員会

(1) 構成

委員長：笛木伸彦

委員：斉藤涼介、高畠聡史、板垣英祐、成田信幸

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和5年4月24日（メール書面開催）

1) 北見農試ホームページの更新について

5) バイテク共同実験室利用委員会

(1) 構成

委員長：宗形 信也

委員：成田信幸、村山真也、小倉玲奈、宗形信也（兼任）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和5年5月2日

1) 本年度の委員確認

2) 令和4年度報告

3) 令和5年度活動計画

4) その他

① 第2回委員会：令和6年2月29日

1) 不要品の処分について

6) 定期作況報告委員会

(1) 構成

委員長：岩崎暁生

事務局長：大西志全

気象担当：大西志全

とりまとめ：田澤暁子

委員：木内 均、林 和希、飯田憲司、田澤暁子、石川圭大、池谷 聡、高畠聡史

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和5年4月14日

1) 定期作況調査報告実施体制

2) 定期作況調査報告実施要領

3) 年間日程

4) 具体的作業日程と該当作物

5) 最終作況の判定基準

7) 公開デー実行委員会

(1) 構成

委員長：岩崎暁生

事務局：古屋幸生、宗形信也

委員：木内 均、池谷 聡、柴田 匠、足利奈奈、足利和紀、森万菜実、三和優吾、
田中一生、成田信幸

(2) 活動内容

① 第1回委員会：令和5年5月12日

北見農試公開デー2023実施の是非について論議。防疫体制の堅持、試食用農産物準備、庁舎建て替えに向けたボーリング調査実施などを考慮して、今年度の開催は見送るのが妥当と結論づけた。

② 第2回委員会：令和5年6月13日

公開デー2023中止に替わるPR案について検討。コープ札幌のイベント（北見市）への出展方針を決定。

③ 第3回委員会：令和5年9月11日

C00P「食べる・たいせつフェスティバル2023」への出展内容について承認。

④ 第4回委員会：令和6年2月28日

公開デー2024は、庁舎改築工事の着工に伴い、開催を中止することし、令和5年度同様にC00P「食べる・たいせつフェスティバル2024」への出展を決定。

8) オホーツク農業新技術セミナー実行委員会

(1) 構成

委員長：笛木伸彦

事務局：古屋幸生、大西志全、鳥越昌隆、宗形信也

実行委員：林和希、池谷 聡、飯田憲司、田中一生、藤田賢司

(2) 活動内容

① 第1回実行委員会：令和5年10月5日（メール書面開催）

1) 実行委員会体制、開催時期、方法等の検討

② 第2回実行委員会：令和6年1月11日

1) 対面開催前提でのスケジュール・担当確認

2) 発表課題成績の選定

③ 第3回実行委員会：令和6年1月29日

1) 予演会・会場下見・ポスターの扱い、等

9) 安全衛生委員会

(1) 構成

委員：梶山 努、岩崎暁生、古屋幸生、藤田賢司、成田信幸、大西志全、鳥越昌隆、
笛木伸彦、池谷 聡、佐々木太陽

オブザーバー：宗形信也、片山正寿、門なつみ

(2) 活動内容

令和5年 4月12日：組織体制検討

令和5年 5月17日：職場巡回（麦類畑作G（畑作））

令和5年 6月 7日：意見交換（業務車事故について）

令和5年 7月11日：職場巡回（麦類畑作G（麦類））

令和5年 8月 7日：意見交換（夏の農作業安全について）

令和5年 9月 7日：職場巡回（生産技術G）

令和5年10月11日：意見交換（秋の農作業安全について）

令和5年11月 9日：職場巡回（馬鈴しょ牧草G）

令和5年12月13日：意見交換（業務車事故について）
 令和6年 1月10日：職場巡回（総務課）
 令和6年 2月 7日：意見交換（春作業で留意すべきこと）
 令和6年 3月11日：総括

3 刊行印刷物

印刷物名	発行年月	頁	部数
飼料作物の育種に関する試験成績書	R6. 3	52	30

4 広報活動

1) シンポジウム・セミナー等

名 称	開催日	場 所	内 容	参加者
オホーツク農業新技術セミナー	R6. 2. 28	訓子府町公民館	講演8題、パネル展示10枚の展示が行われた	

2) マスコミ、広報誌等による報道

タ イ ト ル	報 道 機 関	掲載・放送日
該当なし		

3) 展示会等への出展、公開デー

(1) 北見農試公開デー2023

庁舎改築準備のため開催を休止した。

(2) COOP「食べる・たいせつフェスティバル2023」出展

北見農試公開デー2023休止の代替として、9月16日（土）開催の同フェスティバルに出展した。

会場：サンドーム北見&サンライフ北見

展示：育種作物3作物（小麦、馬鈴しょ、チモシー）パネルおよびサンプル、これらに係るクイズ

5 見学受入れ

年月日	団 体 名	人 数
5月26日	満寿屋商店 ますやパン	1
6月8日	北見市北見自治会連合会	30
6月20日	美幌町種子麦生産組合	8
6月26日	きたみらい農協南地域加工馬鈴薯部会	20
6月27日	大雪山麓倶楽部（普及センター大雪支所）	7
6月28日	JAびえい麦豆生産部会	30
7月3日	チホク会（事務局山本忠商店）	20
7月7日	美唄市水稻直播研究会（JAびばい）	20
6月27日	訓子府中学校	4
7月7日	居武士小学校	6
7月4日	ホクレン	3
7月10日	東京農大北方圏農学科	6
7月12日	農業大学校	2

7月7日	株式会社ロベルテ、網走農業改良普及センター、オホーツク振興局農務課	4
7月12日	北海道澱粉工業協会	12
8月22日	斜里町農民同盟青年部	9
8月25日	ホクレン肥料株式会社	23
9月7日	デリア食品株式会社	22
9月13日	ホクレン北見支所（農水馬鈴しょ担当若手職員2名含む）	5
11月16日	千歳市農業委員会	15
11月30日	JA津別町	12

VI 技術指導および研修

1 研修生の受入れ

研 修 項 目	団 体・人 数	研修期間	対応グループ
令和5年度普及指導員指導力養成研修（高度専門研修・畑作）	十勝農業改良普及センター十勝東部支所（1名）、十勝農業改良普及センター十勝東北部支所（1名）	R5. 6. 5～ 6. 6	技術普及室、 麦類畑作G、 馬鈴しょ牧草 G、生産技術 G

2 講師派遣

研修会および講習会	主 催 者	開催日	演 題	派遣者
北見商業高校出前授業	オホーツクベーク ル	R5. 7. 12	北海道の小麦、オホーツクの 小麦について	大西志全
北海道畑作研究懇話会冬期 研修会	北海道畑作研究懇 話会	R5. 3. 2	気象変動が小麦の栽培と育種 に及ぼす影響	大西志全
生産者講習会	北海道グレインカ ンパニー	R6. 2. 2	2023年の豆類生産における気 象、病害虫の影響	田澤暁子
しゃきっ娘アグリセミナー	網走農改清里支所	R6. 2. 8	オホーツクにおける豆栽培の 課題	田澤暁子
令和5年度の豆作り講習会	日本豆類協会	R6. 2. 20	豆類の新品種と品種特性	田澤暁子
令和5年度高品質てん菜づく り講習会	北海道農産協会	R62月～5月	令和5年産てん菜の生育経過と 今後の留意事項	池谷 聡
道南4地区てん菜作り研修 会	道南地区てん菜振 興協議会	R6. 2. 14	令和5年産てん菜の生育経過と 今後の留意事項	池谷 聡
JAようてい種馬鈴しょ部会 の現地研修会	北海道種馬鈴しょ 協議会	R5. 12. 21	ゆめいころの普及促進につい て	品田博史
第2回ジャガイモシストセ ンチュウ類抵抗性品種の普 及に関する情報交換会	日本いも類研究会、 一般財団法人いも 類振興会	R5. 10. 31	ゆめいころの開発及び普及	品田博史
訓子府町馬鈴薯耕作組合主 催現地講習会	訓子府町馬鈴薯耕 作組合	R5. 7. 12	ゆめいころの特性について	品田博史
北見地区食用馬鈴しょ振興 会 令和5年度生産者交流 会	北見地区食用馬鈴 しょ振興会	R6. 1. 30	生食用馬鈴しょ「ゆめいころ」 の紹介	品田博史
オホーツク管内TMRセン ター連絡会代表者会議	オホーツク管内T MRセンター連絡	R5. 3. 15	オホーツク管内の牧草品種に ついて	飯田憲司
令和5年度清里町指導農業 士・農業士会冬季研修会	清里町指導農業士 ・農業士会	R5. 12. 20	肥料高騰下における畑作物の リン酸減肥の考え方について	笛木伸彦

JAしべちや野菜講習会	J A しべちや	R6. 2. 7	だいこんのヒメダイコンバエ 防除対策試験	小倉玲奈
小清水町農業協同組合畑作 技術講習会	小清水町農業協同 組合	R6. 2. 22	肥料高騰対策 てん菜の適正 な減肥によるコスト削減方法 について	笛木伸彦
令和5年度良質小麦安定生 産技術講習会	一般社団法人北海 道農産協会	R6. 2. 27	本年注意すべき病害虫	小倉玲奈
てん菜における適正施肥技 術研修会	網走農業改良普及 センター網走支所	R6. 3. 11	てん菜における適正施肥技術 について	笛木伸彦
J Aたいせつ中長期的な酒 造好適米生産に向けた研修 会	J Aたいせつ	R5. 7. 19	北海道における水稻の高温障 害について-胴割粒・腹白粒発 生対策を中心として-	田中一生
令和5年度拓殖大学北海道 短期大学「日本酒学」の講 義	拓殖大学北海道短 期大学	R5. 10. 13	北海道における酒造好適米(酒 米) の品種改良と今後の課題	田中一生
令和5年度良質米安定生産 技術講習会	北見地区米麦改良 協会	R6. 3. 13	きたゆきもちの胴割粒の発生 要因とその対策などについて	田中一生
令和5年JAきたみらい水稻 部会講習会	JAきたみらい水稻 部会	R6. 3. 15	きたゆきもちの胴割粒の発生 要因とその対策などについて	田中一生
令和5年JAめまんべつ水稻 部会講習会	JAめまんべつ水稻 部会	R6. 3. 19	きたゆきもちの胴割粒の発生 要因とその対策などについて	田中一生
令和5年度普及指導員新任 者早期養成研修（新任者研 修Ⅰ）	農政部技術普及課	R5. 5. 23	畑作の基礎	片山正寿
令和5年度普及指導員指導 力養成研修（高度専門研修 ・畑作）	農政部技術普及課	R5. 6. 5～6	昨今の畑作に関する情勢につ いて	片山正寿
農業経営者育成研修・農業 経営分析コース1期	農業大学校	R5. 6. 6	経営分析の基礎	添島 均
令和5年度普及指導員新任 者早期養成研修（スペシャ リスト研修・前期）	農政部技術普及課	R5. 6. 15	畑作の地域課題解決に向けて	片山正寿
稲作経営専攻コース2学年 ・第1期集中講座	農業大学校	R5. 8. 18	営農Naviを利用した経営計画	添島 均
令和5年度普及指導員新任 者早期養成研修（新任者研 修Ⅱ・前期）	農政部技術普及課	R5. 8. 21 -8. 25	農業簿記の基礎 病害・害虫の診断手法	添島 均 浅田洋平

令和5年度普及指導員新任者早期養成研修（新任者研修Ⅱ・後期）	農政部技術普及課	R5. 9. 4 -9. 8	農業簿記の基礎 病害・害虫の診断手法	添島 均 浅田洋平
令和5年度普及指導員スペシャリスト強化研修（経営・労働）	農政部技術普及課	R5. 10. 4 -10. 6	経営改善提案モデルの作成・発表	添島 均
令和5年度普及指導員指導力養成研修（高度専門研修・経営労働）	農政部技術普及課	R5. 10. 10 -10. 12	農業経営と簿記指導について 経営計画の策定手法について	添島 均
令和5年度普及指導員新任者早期養成研修（スペシャリスト研修・後期）	農政部技術普及課	R5. 11. 20	畑作の地域課題解決に向けて	片山正寿
農業経営者育成研修・農業経営分析コース2期	農業大学校	R5. 12. 1	経営計画（水平比較）	添島 均
農業経営者育成研修・農業経営分析コース3期	農業大学校	R6. 1. 19	経営計画（経営計画の発表）	添島 均
令和5年度 農畑作物関連栽培技術等研修会	NOSAI北海道	R5. 2. 19	てん菜の栽培管理について	片山正寿
良質小麦安定生産技術講習会	上川地区米麦改良協会	R5. 2. 22	良質小麦安定生産に向けて 小麦の病害虫対策について	片山正寿
良質小麦安定生産技術講習会	北見地区米麦改良協会	R5. 2. 24	良質小麦安定生産に向けて 小麦の病害虫対策について	片山正寿
阿寒野菜組合技術研修会	J A阿寒	R6. 2. 29	ヒメダイコンバエの生態と防除対策について	浅田洋平
J Aきたみらいもち米生産組合講習会	J Aきたみらい	R6. 3. 15	低コスト・省力化対策について	添島 均
女満別町稲作生産組合講習会	J Aめまんべつ	R6. 3. 19	低コスト・省力化対策について	添島 均

3 職員研修

氏 名	研 修 項 目	場 所	期 間
古屋幸生	新任課長補佐級研修	第2水産ビル	R5. 8. 9～R5. 8. 10
足利奈奈	ハラスメント相談員研修	オンライン開催	R6. 2. 8
古屋幸生	ハラスメント相談員研修	オンライン開催	R6. 2. 9
池谷聡	てん菜研究会1)	北農ビル19階会議室	R5. 7. 19～R5. 7. 19
田中一生	日本作物学会第256回講演会 ¹⁾	佐賀市	R6. 9. 14～R6. 9. 16
小澤 徹	北日本病害虫研究発表会 ¹⁾	仙台市	R6. 2. 20～R5. 2. 22
森 万菜実	北日本病害虫研究発表会 ¹⁾	仙台市	R6. 2. 20～R5. 2. 22
佐々木太陽	北日本病害虫研究発表会 ¹⁾	仙台市	R6. 2. 20～R5. 2. 22

1) 専門研修Ⅱ

4 職場研修

研修会および講習会	講 師	開 催 日
交通安全について	総務課長 古屋幸生	R5. 5. 31
ハラスメントについて	総務課長 古屋幸生	〃
一般事業主行動計画について	総務課長 古屋幸生	〃
病虫害汚染防止について	研究部長 岩崎暁生	〃
規則を守った研究活動について	研究部長 岩崎暁生	〃
熱中症を知ろう！	研究主幹 鳥越昌隆	〃

5 国際交流

交流事業名	派遣内容	派遣職員	期 間
該当無し			

Ⅶ そ の 他

1 技術体系化チーム

技術体系化チームとしての取り組みはなかった。

2 オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）

オホーツク地域農業支援会議のプロジェクト課題は、今年度から「大豆間作小麦栽培の対応」について取り組むこととなり、試験ほ場の設置と越冬前調査を行った。

オホーツク管内の各関係機関より令和6年度地域課題・農業試験研究課題ニーズとして3件の要望があった。要望の具体的内容把握のため、それぞれ現地聞き取り調査を実施した。

現地聞き取り調査： 10/31 JAつべつ

11/2 JAオホーツク網走

9/12、3/13 滝上町役場

8/17、10/2 ホクレン訓子府農場

3 表彰・受賞

（1）令和5年北農賞（第84回）（令和5年12月15日）

品種：「馬鈴しょ」「コナヒメ」「コナユタカ」「パールスターチ」

池谷 聡・江部成彦・藤田涼平・千田圭一・大波正寿・萩原誠司・中山 輝・田中静幸・入谷正樹・伊藤 武・竹内 徹・安田慎一・三上晃一郎・守屋明博・板谷智靖・福田朋彦・田宮誠司・津田昌吾・小林 晃・高田明子・浅野賢治・西中未央・向島信洋・森 元幸

（2）令和5年北農賞（第84回）（令和5年12月15日）

報文：「秋まき小麦の起生期からの可変追肥体系における収量の安定化効果」

原 圭祐・木村智之・笛木伸彦・石倉 究

（3）第16回北日本病害虫研究会賞

防除技術開発・技術普及部門：「北海道で大発生したコムギなまぐさ黒穂病に対する総合防除技術」

小澤 徹・新村昭憲・森万菜実・小松 勉・大木健広

第77回道新文化賞（経済部門）

高品質米「ななつぼし」「ふっくりんこ」「ゆめぴりか」開発

北海道立総合研究機構農業研究本部（品田博史・木内 均・田中一生・宗形信也）

日本育種学会・日本作物学会北海道談話会 若手発表賞奨励賞

北見農試秋まき小麦育成系統の育種データを用いた重要な農業形質と一次加工適性に関するゲノムワイドアソシエーション解析

斉藤涼介他

4 行事

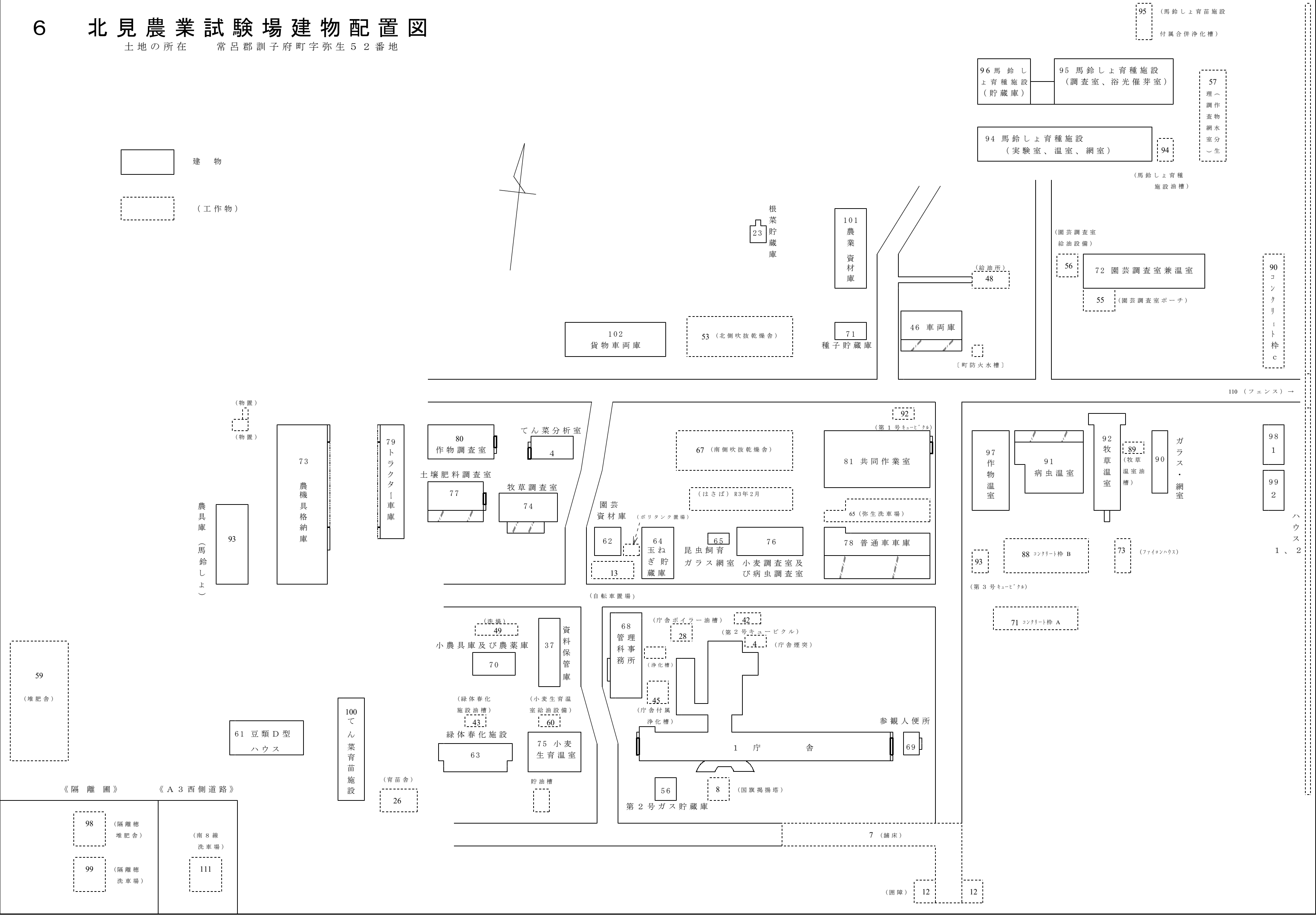
月	日	行	事	名	月	日	行	事	名
4月	3日	辞令交付式(新規採用)			12月	1日	北見農試現地委託試験成績検討会 (Web併用)		
	20日	(Web開催)第1回安全推進・情報連絡会議				4-5日	飼料作物品種比較試験成績検討会		
5月	10日	第1回農研本部場長会議				11日	場内成績検討会議		
	18日	(Web開催)第2回安全推進・情報連絡会議				14日	(Web開催)第2回研究部長会議		
	31日	職場研修 (ほ場汚染防止・労働安全等)				14日	北見工大社会連携推進センター産学官連携推進員・協力員合同会議 (欠席)		
6月	2日	(Web開催)第1回研究部長会議				15日	第84回北農賞表彰状等授与式		
	9日	第2回農研本部場長会議				19日	(Web開催)農業研究本部臨時場長会議		
	23日	場内見学案内リハーサル			1月	4日	仕事始め		
	15日	第3回安全推進・情報連絡会議				5日	北見地区消防組合訓子府消防団出初式		
	19日	場内新規課題検討会議				11日	訓子府町新年交礼会		
	23日	(Web開催)全国農業関係場所長会議				18日	(Web開催)第5回農研本部場長会議		
	29-30日	新規課題検討会議(畜産部会)				18日	(Web開催)第4回安全管理者会議		
7月	4-7日	新規課題検討会議			22-26日	(Web併用)北海道農業試験会議成績会議			
	20日	第4回安全推進・情報連絡会議				23日	(Web開催)第8回運営推進会議		
	31日	(Web開催)第1回オホーツク地域農業気象連絡協議会			2月	9日	場内設計検討会議 (馬牧G、麦類)		
8月	7日	第11回訓子府まちづくり推進会議				13日	場内設計検討会議 (生技G、畑作)		
	31日	北海道農業試験会議 (秋まき小麦設計会議)				14日	NATEC研究交流会		
9月	21日	(Web開催)第1回安全管理者会議				15日	(web開催)第5回安全管理者会議		
	26日	(Web開催)第5回運営推進会議				15日	農業新技術発表会(全道版)		
	29日	(Web開催)第3回農研本部場長会議				19日	オホーツク地域農業技術支援会議・五者会議		
10月	11日	(Web開催)科学技術振興に関する「北見・網走」地域懇談会				20日	(Web開催)設計会議 てん菜分科会		
	19日	(Web開催)第2回安全管理者会議				20日	(Web開催)第6回運営推進会議		
	24日	(Web開催)第6回運営推進会議				28日	オホーツク農業新技術セミナー		
	30日	作況報告会			3月	4-8日	(Web開催)北海道農業試験会議設計会議		
	31日	オホーツク総合振興局海外悪性伝染病警戒本部幹事会 (欠席)				11日	(Web開催)第2回オホーツク地域農業気象連絡協議会 (欠席)		
11月	6日	第4回農研本部場長会議				15日	(Web開催)北海道農業試験研究推進会議本会議		
	15日	防火訓練				19日	第6回農研本部場長会議		
	16日	(Web開催)第3回安全管理者会議				21日	(Web開催)第6回安全管理者会議		
	16日	(Web開催)第3回安全管理者会議				22日	(Web併用)北見農試現地委託試験設計検討会		
	20日	道産小麦品質向上プロジェクト試験成績検討会				26日	第10回訓子府まちづくり推進会議		
	21日	馬鈴しょ輸入品種等選定試験及び育成系統連絡試験成績検討会				29日	辞令交付式(退職・異動)		
	20日	訓子府町玉葱振興会設立60周年記念式典							
	21日	(Web開催)第7回運営推進会議							
	22日	てん菜輸入品種検定試験等受託試験及び育成系統連絡試験成績検討会							

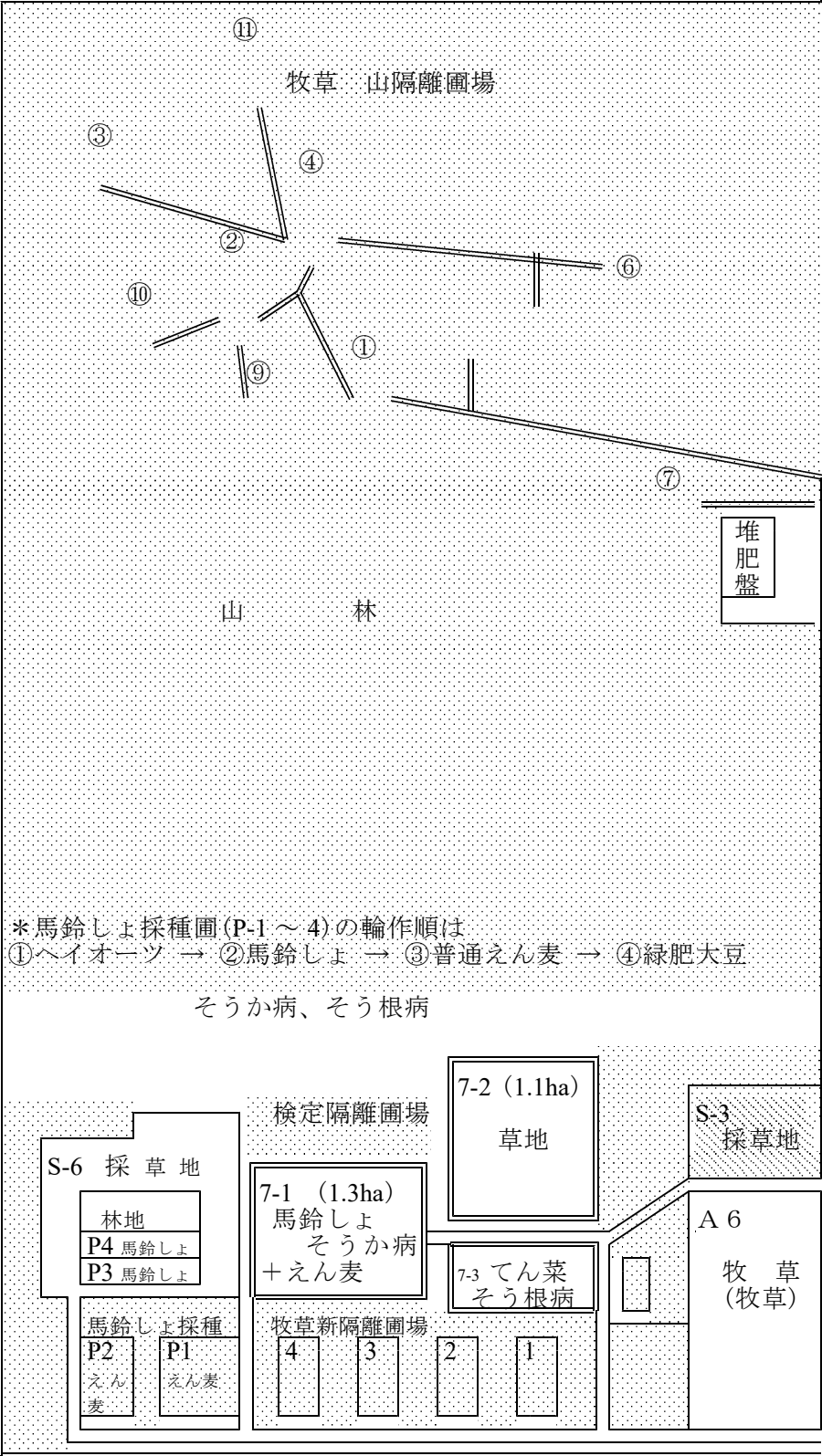
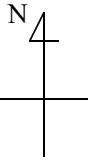
5 自己点検への対応

事 項	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
研究成果発表会の開催件数	0	2	1	1	3	2	1(web)	1(web)	1(web)	1
研究成果発表会への延べ参加人数	0	496	169	136	673	325	938(視聴)	492(視聴)	514(視聴)	124
研究会等の開催件数	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0
研究会等への延べ参加人数	0	0	39	97	60	0	—	—	—	—
発表会・展示会等への出展件数	0	2	1	2	3	0	1	2	2	2
研究報告書の発行状況	4	4	2	4	—	3	0	0	0	0
技術資料の発行状況	1	1	4	1	—	2	2	0	0	0
学会やシンポジウム等での発表件数	24	36	33	20	25	24	10	17	11	20
学術誌や専門誌への投稿論文数	17	10	16	11	9	9	5	7	5	5
普及組織との連絡会議等開催件数	59	9	9	10	5	3	4	5	2	6
技術相談件数	43	66	85	89	85	76	84	94	99	76
技術指導件数	148	78	56	55	53	59	55	33	33	38
研究成果の公表・活用状況(雑誌)	16	15	31	30	17	20	22	15	15	15
研究成果の公表・活用状況(書籍)	6	1	2	2	1	3	9	5	4	0
研究成果の公表・活用状況(新聞)	8	2	7	3	5	3	8	2	4	2
技術審査件数	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0
依頼試験実施件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
試験機器等の設備の提供件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
利用者意見把握調査の回答数	48	94	180	115	145	55	—	—	—	75
研修会・講習会等の開催件数	14	0	2	2	3	1	1	0	0	1
研修会・講習会等の延べ参加者数	1,200	0	520	308	40	100	27	0	0	10
研修者の延べ受入人数	10	2	0	0	28	8	2	0	0	2
特許等の出願件数	0	0	1	1	3	2	2	0	0	0
公開デー等の開催件数	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0
視察者・見学者の受入件数	33	26	37	38	25	35	0	0	0	22
視察者・見学者の延べ人数	512	371	603	648	359	575	—	—	—	259
学会等役員・委員等件数	12	14	17	9	12	9	12	6	6	8
国際協力事業等への協力件数	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0
道関係部との連絡会議等の開催件数	25	37	28	20	6	10	0	0	0	0
市町村との意見交換等の開催件数	3	16	5	8	2	0	0	0	0	0
外部機関等との人材交流件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(大学等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(研究機関等)の派遣件数	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(企業等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(学会等)の派遣件数	6	6	3	4	8	6	0	0	10	4
国内研修Ⅱ(シンポジウム等)の派遣件数	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0
企業等への訪問件数	20	18	22	18	29	38	2	3	0	6
関係団体等との意見交換等の開催件数	25	38	24	29	43	9	3	2	0	0

6 北見農業試験場建物配置図

土地の所在 常呂郡訓子府町字弥生52番地



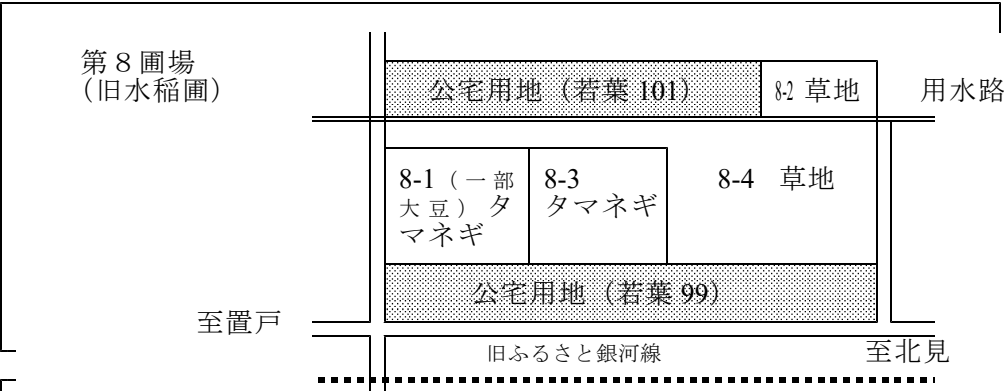


至置戸 南 8 線 (道) 正門 至北見

B 6-1 トモロコシ (牧草)	B 5 緑肥そば (管理)	B 4 馬鈴しょ (馬鈴しょ)	B 3 普通 えん麦 (管理)	B 2 ソルガム 試作 (管理)	B 1 緑肥そば (管理)
B6-2 草地					
B6-3 牧草・えん麦 (牧草)					

C 6 秋播小麦 (麦類)	C 5 秋播小麦 (麦類)	C 4 てん菜 (畑作)	C 3 緑肥大豆 (管理)	C 2 豆類 (畑作)	C 1 スズマル R (管理)
---------------------	---------------------	--------------------	---------------------	-------------------	--------------------------

A 5 混播草地 (管理) トールフェスク+ 白クローバ (H20 造成)	A 4 混播草地 (管理) トールフェスク+ 白クローバ (H20 造成)	D 3 緑肥 ひまわり (管理)	D 2 緑肥 ひまわり (管理)	D 1 野生 えん麦 (管理)	林地 (沢) S-4 採草地
--	--	---------------------------	---------------------------	--------------------------	-------------------------



北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報 令和5年度

令和6年6月発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

〒099-1496 北海道常呂郡訓子府町字弥生52番地

電話(代表) (0157) 47-2146

ファックス (0157) 47-2774

HPアドレス <http://www.hro.or.jp/list/agricultural/research/kitami/index.html>
